

第一部 日本側資料

白井勝美著『日中戦争』

中公新書33／36頁より抄録

蘆溝橋の銃声

蘆溝橋は北平の西郊十数キロ、永定河にまたがっている石橋で、古来名橋として知られており、その付近は燕京八景の一つになっていた。

橋の東側に城壁で囲まれた宛平県城があり、橋の北には、京漢（北平―漢口）線の鉄橋が設置されている。一帯はだいたいの荒蕪地で、鉄道線路用の砂利採取地区でもあり、耕作物としては落花生などがあるにすぎないので、豊台駐屯の日本軍部隊にとっては、夏の高梁繁茂期には唯一の演習場であった。豊台には支那駐屯軍第一連隊（本部、北平）の第三大隊（一木清直少佐）が駐屯していた。天津に本拠をおく支那駐屯軍は義和団議定書（一九〇一）にもとづくもので当時兵力は約千名であった。

中国軍は、河北・察哈爾両省に、宋哲元の指揮する第二十九軍が駐屯し、首脳部は北平にあり、

総兵力約十万を擁していた。張家口に劉汝明の指揮する第百四十三師、南苑に張自忠の第三十八師、そして西苑に位置して北平市内および蘆溝橋一帯にも駐屯していたのが、馮治安の指揮する第三十

七師であった。宛平県城には馮の部下第二百十九団長吉星文支配下の二個中隊が配置されていた。七月七日、一木大隊の清水中隊が夜間演習のため豊台を出発し、蘆溝橋北方約一キロ竜王廟前面地区において黎明突撃の演習を行なった。竜王廟一帯には中国軍が配置されていたのであるから、中国軍の直前における夜間演習であった。午後十時四十分ごろ、清水中隊は竜王廟付近より数発の射撃をうけ、ただちに演習を中止し集合ラッパを吹くと、ふたたび宛平県城方面から十数発の射撃を浴びせられた(第一連隊戦闘詳報)。

中隊は人員点呼を行なったが、兵一名が行方不明になっていたので、清水中隊は豊台の一木大隊長に伝令で報告した。一木はただちに北平の牟田口廉也連隊長に電話をすると、連隊長は大隊の現地急行と、宛平県城内の中国軍営長(葛西注Ⅱ大隊長金振中)に対して交渉を開始すべき旨を命令した。連隊長は連隊付森田中佐を現地に派遣し、第三大隊の主力を蘆溝橋停車場西南側に集結し、宛平県城への戦闘態勢を整え、県城の中国側責任者に調査と謝罪を要求することを下命した。

森田中佐は宛平県長王冷齋(二十九軍副軍長兼北京市長秦德純に報告のため来平)、外交委員林耕宇をともなつて、現地に急行したのである。宛平県城に対して攻撃布陣をした一木大隊は、連隊長認可のもと八日午前五時三十分より竜王廟への攻撃および県城への砲撃を開始するに至った。この間、兵一名の行方不明を理由に日本側は、宛平県城への立入検査を要求して、拒絶されたとみられるが、戦闘詳報にはふれていない(兵一名は間もなく原隊に復帰した)。

八日午後には、現地蘆溝橋に牟田口連隊長、河辺正三旅団長が次々に到着し、夜十一時には酷暑

をおかして強行軍をしてきた第一大隊も戦線に参加した。いよいよ九日早暁を期して県城の総攻撃を実施することとなり、待機していたところに、午前三時北平特務機関(葛西注Ⅱ日本の)から、宛平県城の中国軍は午前四時より蘆溝橋をへて永定河右岸地区に撤退する旨確約したとの通報がはいった。

この協定は、日本軍は豊台へ、中国軍は永定河右岸へとそれぞれ撤退し、宛平県城の防備は保安隊が担任するという内容であった。

しかし、午前四時になつても中国軍は撤退を開始しなかったので、河辺旅団長は大隊砲による城内砲撃を実施した。中国軍は午前十時半、蘆溝橋を渡つて撤退を開始し、日本側も徐々に原駐屯地に復帰したのである。この間、交代のため宛平県城に向かいつつある保安隊と日本側が交戦するなど、連絡の不備にもとづく紛争も発生した。八日、九日の戦闘で牟田口連隊(戦闘参加人員九一名)の損害は戦死十一名、戦傷三十六名で、中国側の死者は約百名と推定された。以上が蘆溝橋事件の現地状況の概略である。

児島襄著『東京裁判』下

中公新書63 65頁より抄録

東京裁判ナゾの部分

支那事変段階には、事変開始当時の旅団長河辺正三少将、華北駐屯軍参謀長橋本群少将、支那二九軍顧問桜井徳太郎少佐、駐屯軍高級参謀和地鷹二中佐、また中央にいた田中新一中佐、河辺虎四郎中佐その他の証人が現われ、書証が提出されたが、検事側はそのほとんどに異議を申し立て、裁判長は異議のほとんどを容認した。とりわけ、中国共産党関係の証人、書証について、異議は激しかった。

弁護側は四月二十九日、中国共産党の研究者波多野幹一を法廷に召喚した。たびたび協力を求めたが供述書作成も不十分であり、調書に署名も得られないので、あえて裁判所から召喚命令をだして証人席につかせたのである。

しかし、供述書なしになにをいうのかわからない証人は、前例がない。裁判長がその点を指摘すると、畑被告担任の補助弁護人国分友治が、証人はなにか陳述をこわがっているのではないかと、たとずねたが、ウェップ裁判長は、いらだたしげに、

「証人のいまの心境では質問しても無用であろう」

とさえぎって、波多野証人を退廷させた。

書証にかんしても、中国共産党と国民党との問題、つまり中国内政問題が日本の侵略とどんな関係があるか、というコミンズ・カー英検事の異議に応え、ウェップ裁判長は、

「一般段階において、支那あるいはその他の場所での共産主義その他の思想の存在、またはその蔓延にかんする証拠は、すべて関連性なし」

と裁定して、提出される書証を次々に却下した。

書証提出を担当したのは、大島浩被告担任のオーウェン・カニングム弁護人であったが、カニングム弁護人の提出理由の言葉、コミンズ・カー検事の反対につづいて、型どおりの裁判長の言葉が法廷にひびいた。

「多数決により異議を容認し、文書を却下いたします」

初めは細かく異議を述べていたコミンズ・カー検事も、次第に、
「同じ理由をもって……」

と機械的に声をあげ、裁判長も朗読調に裁決をくり返した。

中国共産党の暗躍が支那事変の重大な要因ではないか、という疑問は、すでに事変開幕当時から国際間の論議となっていた。弁護側も反証の焦点をそこにおいていたわけだが、その努力は封止されることになった。

「……よって日支事変の勃発に最も関係多き共産党（ソ連を背景とする）の策謀が裁判資料より除外されることとなった」

と、重光元外相が遺憾の文字を日誌につらねると、畑俊六元帥も、のちに次のように回想した。「裁判終了後、中国代表の梅汝璈判事は中共に移っている。（裁判当時を）ふりかえってみて、おかしな気がする」（なお本稿の見出しは葛西がつけた）

児島襄著『東京裁判』上

中公新書73頁より抄録

近衛公自決す

近衛公爵は、しばしば優柔、臆病などの評を受けるが、身近にいる者は「三千年の公卿の血が生みだした」ような、冷たいシンの強さを、公爵が持っていることを知っている。無類の外交上手、聞き上手なので、近衛公爵と会う者はたちまち自分が信頼されていると思いがちだが、「決して他人を信用しない人でしたな。優柔の気はあったが、不断ではなく、最後は自分でビシロときめました」

と牛場友彦はいう。

関白太政大臣の血筋という意識は、人一倍モダン好きでも消えることなく、天皇の前で足を組んで話せる臣下は公爵だけであった。それだけに自分の身体については病的と思われるほど注意深く、健康に気をくばるのみならず、他人の手をふれさせることは極度にきらった。

貴人——なのである。そういう近衛公爵が、犯罪人の名の下に法廷に立つことに耐えられるだろうか。（中略）

近衛公爵は第一次戦犯の指名をうけて自決した元文相橋田邦彦の家を弔問したとき、橋田夫人に、橋田邦彦がどこで、どのようにして青酸カリをのみ、どこを歩いてどこで倒れたか、異常なほど熱心に質問していた。牛場友彦はその様子を思い出し、自決するとすれば青酸カリと予想して、次男通隆にさがさせたのだが、それらしいものは見つからなかった。

次男通隆はベッドにはいった公爵の側で、しきりに話しこんだ。自決警戒のためである。牛場友彦は松本重治と一緒に隣室で寝ていたが、ボソボソという隣室の話し声は、午前二時すぎまでつづいた。

なにか書いてほしい、と通隆がいうと、近衛公爵は用箋に鉛筆ですらすらと書き流した。

「僕は支那事変以来、多くの政治上錯誤を犯した。之に対し深く責任を感じて居るが、所謂戦争犯罪人として、米国の法廷に於て裁判を受けることは、堪え難いことである……」

近衛公爵は、いずれ冷静さをとり戻した時代がくれば、

「その時初めて、神の法廷において正義の判決が下されよう」

と書き終えると、一緒に寝たい、という通隆の願いに首をふった。近衛公爵は他人がいると寝つけない。夫人もふすまをへだてた別室で寝る。その慣習を知っているので、通隆はひきあげた。牛場友彦はそのあと、隣室からカサカサという紙の音を耳にしたような気がしたが、間もなく眠った。

「牛場さん、牛場さん」

という夫人の声に眼をさました。

「牛場さん、やったらしいわよ」

隣室に走りこんでみると、近衛公爵は死んでいた。部屋の明りがつけばなしなのに夫人が気づき、発見したという。

十二月十六日午前六時ごろ——都下南多摩郡多摩村字蓮光寺の別邸で木戸幸一侯爵が、巢鴨行きにそなえて起きだしたところである。

〔葛西注〕

①牛場友彦は近衛公の親友の一人。

②通隆は近衛公の次男。現財団法人・霞山会会長。東大講師。

③近衛公の通隆宛の遺書には「蒋介石政権を相手とせず、と声明したのは全く僕個人の錯誤であった」という文面もある由。

④日中戦争が中国共産党の仕組んだ罠であったことを全く知らずに、近衛公は自決した。

東京朝日新聞（夕刊一面）

昭和十二年七月九日 発行

北平郊外で日支両軍衝突

不法射撃に我軍反撃

二十九軍を武装解除

疾風の如く竜王廟占拠

〔北平特電八日発〕 八日午前零時頃、わが駐屯部隊が北平郊外蘆溝橋付近において夜間演習中、蘆溝橋駐屯の第二十九軍第三十七師（師長馮治安）に属する二百十九団の一部が不法にも数十発の射撃を加えたため、わが軍は直ちに豊台駐屯部隊に急報して出動を求め、支那軍に対して包囲体勢を作り対峙、わが軍は支那側の不法行為に対し、嚴重謝罪を要求したところ、午前四時二十分、支那側は再び不法射撃を行ないたるため、わが軍も遂に火蓋を切り、双方機関銃迫撃砲をもって交戦、銃砲声は暁の空を破って遙か北平城内まで伝わったが、遂に支那軍を撃退し、竜王廟を占拠した。蘆溝橋の支那部隊に対しては目下、武装解除中である。

〔天津特電八日発〕 支那駐屯軍司令部午前八時半発表は、不法なる支那軍の

砲撃に対し嚴重なる交渉を開始せんとするや、蘆溝橋北方千メートルの竜王廟にあった支那軍は、八日朝五時半不法にも再び射撃を開始した。よって、わが軍は直ちにこれに応戦して撃退し竜王廟を占拠した。なお、蘆溝橋の支那軍に対しては目下、武装解除中である。軍は支那軍の不法な挑戦行為に対して、断乎その反省を促す。

支那の要請で一時的停戦

〔北平特電八日発〕 八日午前九時半、支那側の停戦懇願により、両軍ひとまず停戦状態に入ったが、わが軍は午前十一時までに付近一帯の支那軍が完全に撤退を実行しない限り、全滅作戦を以って撃退すべしとの強硬態度を持し、この決意のもとに目下、現地交渉が進められつつある。

硝煙の戦線を行く

突如銃を擬し脅迫

凄絶・砲火耳朶を打つ

〔蘆溝橋にて常安特派員八日発〕 北平城外を西南方へ十一マイル、自動車を駆って日支両軍交戦中の蘆溝橋に向ったが、進むにつれて銃砲声はますます激しく耳を打つ。走ること一時間半にして平漢線の陸橋に到着すると、ここには我が増援部隊の一部がトラック数台を乗り捨てて、小高く連なる線路に拠って前方の敵状を偵察していた。遠く望めば西方半マイルばかりに宛平県城（蘆溝橋城）

が見え、県城の後方一帯の森の中数十箇所にわたり砲煙が立ち昇り、迫撃砲、機関銃の音が絶え間なく聞こえてくる。しばらくするうち、蘆溝橋城星高く白旗が二本揚げられたので、記者は直ちに県城西門に車を乗りつけようとしたところ、二、三町手前で城壁の上から支那兵の怒鳴りつけるような誰何を受けたので、身分を明かし、写真機を取り出そうとした途端、支那兵は俄かに銃を擬して発射の姿勢をとり、記者の入城を拒否した。こうしているうちにも銃声は依然として物凄く鳴り響く。やむなく陸橋の堤防まで引き返すと、戦線を視察してきたわが軍の某将校に出会い、交戦の様様をつぶさに聴くことができた。今回の事件は支那側の不法射撃によって発生したものであることと一点の疑いもなく、戦友中に死傷者さえ出した。わが将兵一同痛憤の程もきこそと思われる。支那側はあちこちに点々と兵營が散在しているので、わが部隊はかなり苦戦しながら午前六時頃に至り、竜王廟に拠る敵兵の主力を撃退したので、事態はようやく小康状態に向っているが、情勢の展開はもとより予断を許さない。

わが電線を切断し

行動妨害を企つ

支那側計画的行為か

〔北平特電八日発〕 七日深夜衝突事件発生と共に北平、天津間のわが軍用電線は北平、豊台間において一カ所、豊台、天津間において一カ所を切断されていることが判明した。なお、事件発生当時、

北平部隊は演習のため通州方面に行軍中で、集結命令により現地に急行せんとするや、支那側は朝陽門（通州街道口にある北平城門）を閉鎖して右部隊の行動に障害を与えたるが如き事実もあり、それらの点を綜合すれば今回の事件は必ずしも突発性のものでなく、支那側の計画的行動ではないかとの疑念がきわめて濃厚であるといわれている。」

南京政府強硬

宋哲元氏に帰平命令

〔南京八日発同盟〕 廬山にある蔣介石氏は蘆溝橋事件に関し、南京よりの急電に接するや午前八時、直ちに幕僚会議を開き対策を協議したが、その結果、目下山東省樂陵に引きこもり中の宋哲元氏に對し至急北平に帰任の上、問題の善後処置にあたるべきことを電命した。

〔南京八日発同盟〕 蘆溝橋付近における日支軍衝突事件に関して、八日午前六時頃、第二十九軍司令部から南京軍事委員会及び廬山の蔣介石氏宛て簡単な報告が届いたが、その報告は全く事実を歪曲したもので、

夜間演習中の日本軍突如わが軍に不法攻撃を加え来り、わが軍やむを得ずこれに応戦す

とあり、支那側はなお詳細不明のため、折り返し第三十八師長張自忠氏及び第二十九軍長宋哲元氏に對し、即時詳細報告するよう命ずると共に、事件の拡大防止方を嚴命した。しかし、外交部に

おいては右現地報告をたてに強硬態度を示しており、廬山にある王寵惠外交部長より命令あり次第、わが方に對し逆捻的に抗議を提出する意図を有している。

已むを得ぬ自衛

今井北平駐在武官談

〔北平八日発同盟〕 蘆溝橋衝突事件に関し、今井北平駐在武官は八日左の如き談話を發表した。

最近、宋哲元氏の不在等も手伝って各種の謠言が行なわれてきたので、日本側としては、支那側の誤解を避けるよう極力努力してきたにも拘らず、かかる事件が生じたのは甚だ遺憾にたえない。今度の事件は全く支那側で演習中のわが軍に對し、突然発砲したことに起因し、しかも日本軍は、真ちに演習を中止し、部隊を集結してひとえに支那側の出方を監視していたのに、支那側は再びこの部隊に對し発砲して挑戦行為に出たもので我方としては真にやむを得ざる自衛行為であって、当然の処置に出たにすぎない。かくの如く不祥事件が再三起ることは日本と冀察との關係上面白からぬことであるから、この種事件の再発を除くため、何等か考慮しなければならぬまい。事件拡大は勿論日本側としては望むところではないが、今後の帰すうは一に支那側の出方いかんにかかっている。

◎今日の問題

滿ソ国境の危機僅かに去って、北支忽ち緊迫す。あちらでも、そちらでも、よくよく撃退されたいとみえる。

東京朝日新聞（二面）

昭和十二年七月十日 発行

蘆溝橋事件一段落

支那撤兵を完了

善後処理交渉に移る

〔天津特電九日發〕 蘆溝橋における日支兩軍の対峙は七日夜来三日間にわたり、形勢重大を極めたが、八日の交渉に引続き、九日朝来七時より午後零時半に及ぶ支那側との交渉及び第一百十旅長何基豐氏が自ら現地に出向き支那軍を説得した結果、ついに午後零時二十分支那軍は永定河右岸地区に撤退を完了したので、我が方も戦闘行動を中止し、事件善後処置の交渉に入ることとなり、現地の兩軍対峙に関する限り事件は一段落を見るに至った。

〔北平九日發同盟〕 宛平県城内支那軍の永定河右岸撤退は九日夕刻までに完了を見た。同軍撤退後の県城内外の治安は日支兩当局協議の結果、銃器を有せざる保安隊約百五十名を以って当てる事となり、既に入城を終わった。

外務省着電

九日午後八時三十分外務省着電によれば九日午後四時蘆溝橋に残留せる支那部隊は完全に永定河西方に撤退を終了した。日本軍は豊台方面に集結しつつある。

〔北平特電九日發〕 支那駐屯軍司令部午後一時三十分發表―蘆溝橋の支那部隊は我が要求を入れ、午後零時二十分ついに撤退して永定河右岸に移れるを以って、我軍は蘆溝橋北側及び東側に兵力を集結し、戦闘行動を中止して事件の善後処理に関する交渉を開始することとせり。二十九軍首脳部が既に速かなる和平復帰と事件の不拡大とを希望しあるに拘らず、蘆溝橋は支那部隊がことさらにその撤退を緩慢ならしめたるは、一昨夜来の竜王廟付近の支那部隊の不法射撃と併わせ考えるも、これが原因は明らかに近時ますます露骨化し来たる南京政府側及び共産党系の支那軍隊、就中その中堅將校以下に対する抗日宣伝の結果なりと断ぜざるを得ず、かくの如きは支那軍上下の意思を阻隔し、延いて冀察側の立場を不利に導くものにして、もしこれにより所謂人民戦線派の宿望達成を助長するが如き結果を招来するあらば、東亜大局のため真に遺憾とする所なり、軍は今後の動向に対し重大なる関心を有す。

ため九日午後四時幕僚を帯同し、列車にて北平に向かった。

〔北平九日発同盟〕 数日中に日支両当局間に事件の善後処理に関する交渉が開始される筈で、双方とも既にその準備に着手した模様である。交渉開始の時期、場所及び代表等はなお決定を見るまでには至っていないが、だいたい日本側は松井特務機関長、冀察側は秦徳純氏が代表となって交渉が行なわれる模様である。

北支駐屯軍の演習

条約に基づく権利

わが軍行動の詳細検討

今回北支において突発した蘆溝橋事件の原因は、夜間演習中のわが軍に対して支那軍が不法射撃をなしたことに起因するが、当時のわが軍の演習は条約上の権利を行使しているにも拘らず、突如支那側の射撃を受けたので、全く自衛上の手段として応戦したに止まり、他意なきことはわが関係当局に達した情報によっても明らかである。条約上の権利Ⅱ演習権Ⅱについては一九〇二年七月の天津還付に関する日清交換公文に、

「……外国軍は操練をなし射撃及び野外演習を行なうこと自由たるべく、ただ戦闘射撃の際には単にその通告を与え可申候」

と規定され、北平、天津に駐屯するわが軍は北支において条約上演習権を有しているのである、今回事件の発生した地区一带は右の権利に基づき、秋季演習をはじめ大小の演習を実施しており、特に蘆溝橋北側地区は住宅地には適せず地形上演習好適地で、殆んど我軍の練兵場化していた。殊に最近は検閲前であるので連日連夜演習を実施していた。のみならず蘆溝橋上下流の永定河原は西方高地を目標とする実弾射撃場としてしばしば利用せられていて、事件当夜の夜間演習の如きも日常茶飯事として支那側は当然予期していたところである。

夜間演習について、わが軍はその旨支那側に通告する条約上の義務は負わされていないが、わが軍としては土民を驚かさないう好意的にその旨、支那側に通告さえしていたのである。また事件発生当時について支那側は種々逆宣伝をなしたが、現地官憲よりの報告によれば、その真相は大要次の如きものである。

今回事件の突発した蘆溝橋と我軍の一部が駐屯する豊台とは約一里半の距離にあるが、七日夜間演習のため豊台を出発した我が一小部隊は前記蘆溝橋北側の演習地区に向かうべく蘆溝橋東北地区を通過中、七日夜半蘆溝橋東側の支那兵から十数発の射撃を受けたので我が伝令は直ちに豊台の兵營に飛び、直ちに非常呼集が行なわれ、八日払暁さらに我が演習部隊が竜王廟の支那軍から発砲される頃までには、既に豊台と北平から実弾と増援隊が現地に到着しており、ここに我軍は支那軍に対して応戦するに至ったものである。

我軍においてはかねて支那側軍事首脳部に対して不慮の事件を防止するため、しばしば支那下

級兵士の抗日態度につき注意を喚起しており、支那軍事首脳部にてもこれを諒としていたものであったが、少しも徹底されなかったのが今回事件突発の誘因となり、不法射撃が行なわれたものと関係当局は見ている。

わが軍死傷者

駐屯軍発表

〔天津特電九日発〕 支那駐屯軍発表（九日午後六時） 今次の蘆溝橋事件において生じたるわが軍の損害は戦死者十一名、負傷者二十七名にしてその氏名左の如し。

▲戦死者 准尉鹿内清、曹長阿部升蔵、軍曹大田早苗、上等兵菅原春司、伍長長谷川喜蔵、一等兵金子長助、同斎藤要三、同太田円市、外三名（氏名未詳）

▲負傷者 中尉川村淳二郎、少尉野地伊七、同松井源之助、准尉佐藤与吉、軍曹小笠原清三、上等兵加藤勝、同中平富雄、同但馬金一、一等兵中村磯太、同板垣正、同久保正一、同阿部清治、同奥原三吉、同小坂信一、二等兵村田由男、同野口三平、同中村伊三郎、同岩崎志津男、同伊藤六之助、同浅岡正次、同木橋条次、同竹内勇雄、同田中充、同小坂三之助、同中村三好、同細井利治、同緑川政男

日高・陳会談

互いに賠償要求を留保

〔南京特電九日発〕 日高参事官は九日午後四時半外交部に次長陳介氏を訪問したが席上、陳介氏より今回の蘆溝橋事件において支那側に死傷百余名を出したるにより、損害賠償その他の要求を保留する旨表明したので、日高参事官は、

わが方の報道によれば事件発生への責任は全然支那側にあり、しかも日本軍に死傷者を出せるに
より日本こそ当然賠償その他の要求を将来に留保する。

旨逆襲し、本件発生の原因が不合理なる抗日使嗾によることを指摘し、支那側の猛省を求めて同六時辞去した。

日高参事官は九日午後南京に帰った王外交部長と十日中に会見の予定である。

東京朝日新聞（二面）

昭和十二年七月十一日 発行

日支全面的衝突の危機

中央四箇師、全飛行隊に

蔣介石進撃令を下す

前線早くも激戦展開

〔十日午後十一時陸軍省に左の公電到着〕 蔣介石は四箇師を石家荘付近に北上するよう命令を発し同時に全飛行隊に対し出動命令を下したものの如し。

〔漢口十日発同盟〕 蔣介石は十日の廬山会議の結果、徐州を中心に駐屯中の中央軍四箇師団に対し、十一日払暁を期し河南省境に集中進撃準備を命じた。

〔天津特電十一日発〕 形勢遂に重大化す

夜襲の敵を敢然反撃

わが軍兩要地を占拠す

彼我共に相当の死傷

〔北平特電十日発〕 午後十一時北平武官室発表 暴戻なる支那兵は前日の日支双方の約束により蘆溝橋付近永定河左岸に一兵も残さぬはずであったが、これを泥土と化し、十日午後七時二十分永定河西岸より蘆溝橋付近のわが部隊に迫撃砲の集中射撃をなし、竜王廟付近は支那兵二小隊東辛庄（蘆溝橋東北方）付近にも兵力不明の支那部隊が同地一帯を占領した。よってわが部隊は一部をもって迫撃砲の射撃を受けながら、午後九時十五分竜王廟の敵陣地に夜襲し、これを占領し、同時に東辛庄も占領した。

右戦闘において日支双方とも相当の死傷者を出した模様である。

東北健児壮烈の奮戦

隊長先頭に敵陣へ突入

第一部 日本側資料

〔天津十一日発同盟〕 牟田口〇隊長の率いる東北健児の竜王廟における戦闘ぶり、真に壮烈無比のものであった。竜王廟は日支双方の不拡大申し合わせによる撤退地域に含まれていた所なるに、支那軍数百は十日この協定を無視して午後十時頃夜陰に乗り、迫撃砲の応援の下に竜王廟に進撃し来たったので、わが部隊は極度に憤激し、直ちに応戦、牟田口〇隊長はこれを手ぬるしと見て自ら

抜刀して先頭に立ち、敵陣に踏み入り、これに続くわが将兵は悉く一騎当千の武士揃いのこととて勇戦奮闘直ちにこれを撃退した。この戦闘は今日までの最も激戦で我が死傷も二十数名に達し、敵は無数の死体を遺棄して退却した。

篠つく雨中の激戦

敵軍を釣瓶打ち

蘆溝橋第一線に観る

〔蘆溝橋にて奥村特派員十日発〕 蘆溝橋事件第一線の状況視察のため記者は、八日午後一時四十五分天津発軍用列車で河辺部隊長、高見救護班長等と共に現地に急行した。午後四時三十五分豊台に到着、直ちに軍用トラックで兵士たちと共に第一線蘆溝橋駅に出發した。豊台市街に通じかかるとかねてわが軍によって守られる支那住民がしばしば手を打ち振って我々を見送る。平漢線踏切を越えるころ豆を煎るような銃声が物凄く耳朶を打つ。幾度か流弾に脅かされつつようやく第一線蘆溝橋駅に到着した。

わが軍の猛撃により蘆溝橋県城に後退した二十九軍は、なおも城壁を利用して盛んに迫撃砲、機関銃を我が陣地に浴びせ、蘆溝橋駅付近一帯は砲煙彈雨の巷と化している。記者はまず戦況如何と蘆溝駅構内に夕食中の北平牟田口隊長を訪問した。

北平部隊幹部の面々が、銃声をよそに一升瓶に詰められたお茶を飲みながら、大きな握り飯を

むさばるように頬ばっている。その間刻々戦況が報ぜられてくる。

夕闇迫る頃より我方より猛烈なる砲撃が加えられ、支那軍に多大の損害を与えた模様であるが、支那軍もかつて見ざる頑強な抵抗を行ない我軍の意気を却って高からしめるものがある。午後八時平漢線にそって散開したわが歩兵部隊から、敵の迫撃砲により重傷を負った豊台部隊佐藤准尉が、小林軍医中尉以下看護兵数名に護られて蘆溝橋駅に送られてきた。大腿部、足部、上膊部五か所に盲貫銃創を負っているのだ。

流れ出る血潮は純白な繃帯を朱に染めて小林軍医の手により応急手当が終わると「残念でした」と一言、痛さを耐えてじっと眼をつぶっているのは痛ましくも悲壮だ。折しも戦線巡視から帰って来た河辺部隊長は佐藤准尉の手を取って「傷は浅いぞ確りせい」と激励の言葉を与え並み居る将兵を肅然とさせる。

こうして激戦は数次に亘り交えられ、やがて夕刻までに判明せる鹿内准尉、太田軍曹以下十名の戦死者が発表された。

その後、蘆溝橋駅付近の激戦で、さきの佐藤准尉以下数名の犠牲者を出した模様である。七日夜半よりの不眠不休の猛撃によって、さしも頑強な二十九軍もようやく沈黙するに至ったが、本隊に入った確報によれば、西苑にある二十九軍の大部隊が蘆溝橋県城にある友軍を援護せんとし八宝山に向かって進軍し、一方各地に分散抵抗中の二十九軍もそれぞれ県城に集結され、夜に入って、更に反撃の拳に出でんとする模様で、これに対し、わが軍は機先を制し城内の敵軍攻撃の決心を固め、

急遽部隊本部を蘆溝橋駅に移動を開始した。

記者はこれよりさき重傷の佐藤准尉及び看護中の小林軍医以下兵士五名とトラックにて豊台に帰還すべく蘆溝橋駅を出発、平漢線踏切を越えて北平道路に車を駆らせたが、真暗闇のこととて遂に豊台への道を見失い、車は悪道路の窪みに立往生のやむなきに至った。

一同はただ重傷の佐藤准尉を一刻も早く豊台に後送しようと汗みどろに塗れながら車の引上げに苦心したが、重傷の佐藤准尉は痛む身体をこらえて起き上がり、

北平道路まで引き返せば自分は豊台への道をよく知っているから、

と悲痛な声で語るのであるが、引き返す術もない。記者は看護兵一名と付近の小部落から戦に怯えていた農民をなだめかすかして三十余名を狩り立て、やっとトラックの引揚げを行ない、午後十一時に到着し、豊台部隊内の野戦病院に昏々と眠る佐藤准尉を収容手術を行なった。その結果は良好でわれわれの労苦が酬いられた。

九日午前四時、河辺部隊長は幕僚と共に豊台から蘆溝橋駅第一線に作戦本部を移動したため、記者も再度第一線に向かうべく午前四時將兵輸送トラックに同乗豊台を出発した。

その頃戦線一帯は篠衝く豪雨となり、戦闘はますます猛烈をきわめ、支那軍にはおびただしい戦死者を出した模様であるが、この日の二十九軍は満洲事変当時の支那軍とは格段の相違あり、その頑強なる戦闘ぶりは敵ながら天晴れとわが軍首脳部をしていわしめた程で、膝を没する泥濘中で濡れ鼠となった將兵の悪戦苦闘は想像に余りある。午前五時協定に基き、支那軍は一斉に撤退を開始

するものと一同は嚴重に監視中、俄然支那側は城壁上に躍り出て、わが軍に対して猛烈に射撃を浴びせかけた。

この不法行為に対し、全軍一斉に憤然色をなし、遂に全線に総攻撃令が発せられ、わが陣地からは一斉に砲撃の火蓋が切々と落され、暁天をついて轟く砲声いんいんとして天地を揺るがさんばかり。約八百メートル前方の宛平県域を望めば、三層樓の宛平県域内は釣瓶打ちの砲弾に見舞われてなかば崩れ、城壁の到るところ白煙もうもうと立ちこめ命中率は百パーセントである。

日支開戦愈切迫す

冀察当局発表

〔北平十日発同盟〕 支那軍が停戦申し合わせをじゅうりんし、暴戾にも我軍に再び攻撃を開始したことは全く計画的行為なることが明らかである。即ち冀察当局は十日午後六時外国記者団に左の如く非公式に発表した。

「今夜中に日支開戦ある見込みだが、我方では日本側の発砲を待ち我方よりは射撃せぬ意向である」

梅津、何応欽協定蹂躪〔天津十日発同盟〕 蔣介石氏が中央軍に河南省境出動命令を発したことは梅津、何応欽協定を蹂躪するものに外ならず、かつ第二十九軍に対する断乎交戦せよとの激励電の如き、南京の中央政府の態度は口に不拡大を唱えその誠意皆無なるを証明するものとして、わが軍

当局はいたく憤慨している。

二十九師（葛西注Ⅱ軍、の誤り）を使喚し

交戦自滅に導く

中央軍冀察乗取りの肚

〔天津特電十日発〕 南京政府は蘆溝橋事件に対し表面不拡大方針を希望しつつ、実際は二十九軍と日本を一戦させ、冀察政権を潰滅せしめると共にこの機会に中央軍を一気に冀察地区に入れようとしていることが漸次明白となってきた。すなわち事件勃発と同時に南京政府が冀察に対日強硬を訓電すると共に、蔣介石らは自ら宋哲元氏宛電報で「中央軍四箇師を河南省北部に前進せしめ状況により更に北方に直ちに送る」と激励した。かくて交渉開始当時において二十九軍側の態度は強硬を極め、停戦までに甚しく長時間を要したのであった。その後、上海では愛国団体が民族救亡会を組織して二十九軍に対して「長城戦の勇士よ徹底的に抗争して辱を雪げ」と激励、更にこれにならうもの続出している有様である。わが方ではこれらの状況を重視し、若し現地及び北支一般の空気が悪化する時は、その責任は一に抗日戦線を充実して二十九軍を使喚する南京政府にありとの見解を持っている。

北支協定否認へ

冀察勢力分裂を企図

〔南京特電十日発〕 南京政府当局の蘆溝橋事件に関する態度は、事件発生直後は周章狼狽して事件不拡大を切願していたが、停戦成立と共に逆捻^{ぎやくてん}の強がりを見せ、同事件善後処置に関し形式上は現地交渉におくも実質上は中央の外交交渉に移さんとする態度を示し、北支における現存の各種の協定に対し部分的否認の巧妙なる作戦に出るものとみられる。即ち北支駐屯軍の兵数、北支定期航空等の北支における軍事協定につき重要な発言を企図しているといわれ、一方冀察当局を牽制するとともに二十九軍の態度を硬化せしめ、冀察政権内の諸勢力分裂をはかり、一石二鳥の手をうたんとしているものであり、蘆溝橋事件の善後処理は南京政府が有力に指導する結果、交渉は紛糾を免れぬ模様である。

支那抗議提出

〔南京十日発同盟〕 南京政府外交部は十日午後七時文書を以って、我が大使館に蘆溝橋事件に関する正式抗議を提出してきた。抗議内容は、日支両軍衝突の責は全然我方にあることを強弁し、一、日本側の正式謝罪と責任者の処罰、二、死傷軍民及び砲撃による建物の損害、三、不祥事の再発を防止すべき日本側の今後の保障を要求せるものである。

〔南京十日発同盟〕 国民政府外交部は日本大使館に対し抗議を発すると同時に、冀察側の秦徳純、胡宗南氏に対して右抗議と同一趣旨に基き、日本側と折衝交渉に当たるよう訓電を発した。中央が外交専員楊開○氏を北平に急派に決したのも、対日交渉援助の名の下に冀察側の現地における折衝ぶりを監視するためとみられる。（葛西注Ⅱ〇印判読不能）

臨時閣議準備

書記官長通達

風見書記官長は十一日午前三時全閣僚に対して「北支事件再発のため十一日中に臨時閣議を開くこととなるかも知れないから準備されたき」旨電話を以って通達した。

緊張の陸軍省

今晚二時、緊急会議

支那側の不法挑戦により蘆溝橋方面の事態は再び險悪化し、しかも支那側の行為は頗る計画的とみられるので陸軍首脳部は事態を重大視し、十一日午前二時陸相官邸に杉山陸相、梅津次官、後宮軍務局長、秦新聞班長以下関係官全部参集し、現地よりの情報にもとづいて緊急対策につき重要協議をとげた。

全省非常召集

陸軍省では十一日午前三時陸軍省全員に対し、午前六時までに全員登庁するよう非常召集の電命を発した。

明らかに計画的挑戦

責は支那にあり

わが陸軍重大決意

十日夜に至って支那側が再び前日の誓約を蹂躪し、わが軍に対し積極的な計画的挑戦行為を加えるに至った事に対し、わが陸軍当局は左の如き観測を下しており、事件拡大の責任は一に支那側の不法行為にありとなっている。すなわち、

支那軍は九日正午蘆溝橋を撤退、一切の戦闘行為を停止することを誓約しておきながら、十日午後七時二十分その約を破り永定河を渡って竜王廟へ進出し、しかも八宝山方面から我軍に向かって襲撃を開始、永定河右岸地区から迫撃砲を以って集中射撃を始め、わが軍はやむなくこれに応戦するに至ったが、今次の行動が支那軍の計画的挑戦なることは次の事実に徴し明瞭である。

すなわち支那軍は九日午後蘆溝橋を撤退しながら後方においては続々弾薬補充、兵力の増加を行なう一方、北平城及び要所に土のうを積み嚴重なる警備を配布、さらに北寧線を遮断してその交通を停止し、しかる後各方面より攻撃に移ったものである。さらに支那側は或いは飛行隊に動

員を下し、或いは南方より兵力を北上せしめて刻々我に脅威を与えつつあり。わが軍は現在まで出来るだけの隠忍をして来たが、もはや形勢の前途は全く逆転し難いものがあるに至った。その責任は一に支那側にあるものである。

東京朝日新聞（夕刊一面）

昭和十二年七月十一日 発行

“蘆溝橋事件” 処理に日支対立

飽くまで現地交渉主義

中央介入却って紛糾（日本側）

〔南京特電十日發〕 蘆溝橋事件につき南京駐在の日高參事官は、本省の訓令により十日午前十一時外交部に王部長を訪問し、今回の蘆溝橋事件は北支における小児病的風潮の激化による悪性の事件であつて、わが方としては最近の抗日風潮にかんがみ居留邦人の十分なる保護を要求する。蘆溝橋事件について目下現地にあつて調査中であるが、その非は支那側にあることは明白であり、これによる損害及び一切の合理的要求を留保するものであると説明した。

〔北平十日發同盟〕 蘆溝橋事件の善後処理交渉は事情の最もよく判っている日本軍と、冀察両当局

との間に現地処理主義の下に行なうのが、事の処理をより速かに且つ簡単に解決する所以であつて、もしこれを中央の交渉問題とするにおいては必ずや問題の敏速円満なる解決を期し難いのみならず、一步を誤れば既に一段落を告げた事件を再び紛糾拡大に導くおそれさえある、との見解が日支現地両当局間に有力である。現地両当局においてはすでに九日夕来それぞれ交渉準備にとりかかつている模様で、双方の内部的準備がなり次第正式に支那側に対し交渉開始となるわけである。

冀察と折衝防止

中央の意思を盛る（支那）

〔上海特電十日發〕 蘆溝橋事件の初步解決につき、支那側は停戦につき何等の条件なしと国民に知らしめる一方、保安隊による治安維持は冀東戦区時代の先例もあり、悪例なりとして反対の意向を表明し、速かに自主的な治安維持を主張している。王外交部長は九日南京に帰来後、直ちに外交部首脳部を召集、事件の経過を詳細に聴取するとともに今後の外交対策を協議したが、冀察の駐京（葛西注＝南京）代表李世軍氏は九日廬山^{ろく}山に向かい、政府首脳部に本件^{ほんけん}の経過を報告した。南京政府は八日、九日と口頭を以つて日本側に抗議したと称しているが、十日に多分書面を以つて正式抗議を提出する模様である。以上の如く政府の方針は今回の事件を契機として、日本側が冀察当局とあらゆる問題の折衝を行なわんとするを防止せんとする方針であることが確実となった。

始せんとするものと観測されるに至った。支那側一部はすでに蘆溝橋方面の保安隊による治安維持は、日本側が冀察における二十九軍の撤退を要求する前提なりとさえ伝えて警戒し、北支より支那軍は一步たりとも退却すべからずと全面的に二十九軍の後援と冀察当局を激励する態度をとっているが、これは中央が政治、軍事、経済の各々に対して完全なる中央一元化を企図することを証明するもので、日本が従来 of 如く北支問題は冀察当局を相手として交渉を行なわんとする建前には相当の困難が予想され、今後の北支問題はますます解決に難渋の度を加うべく、日本の全面的対支政策に重大なる影響あるものとみらる。

宋氏に帰任電命〔上海十日発同盟〕 蔣介石は目下山東省楽陵に帰省中の宋哲元氏に対し、九日午後「時局緊急の折柄、至急北平に帰任し時局收拾に当るべし」と電命した。

塘沽協定の廃棄提案か

〔上海特電十日発〕 南京政府の一部および支那側識者の間には、今回の蘆溝橋事件の発生が塘沽停戦協定に起因するものと曲解して同協定の廃棄を強硬に主張しつつあり、問題の進展如何では南京政府は対日強硬態度の政治的効果を狙い、機をみて日本に対してこれを提議せんとする情勢である。

山東へ蔣伯誠氏

〔上海十日発同盟〕 蔣介石氏は今次蘆溝橋事件に関する対策会議の結果河北、山東両省の中央化を促進し、その防備を一層強固ならしめる必要ありとの方針を決し、九日蔣伯誠氏を済南の韓復榘氏のもとに急派した。

十勇士入院〔北平十日発同盟〕 蘆溝橋事件で名譽の負傷した勇士のうち、川村中尉等十名は九日深更豊台より特別列車で北平に到着し、直ちに北平陸軍病院に収容された。なお比較的軽傷者は同列車で天津に送られた。

支那いよいよ米国に依存

米支銀協定拡充

両国政府で共同声明

〔ニューヨーク特電九日発〕 モーゲンソー米財務長官は九日孔支那財政部長と共同声明を發し現在（一九三六年五月締結）の米支銀協定に基づく取りきめの外に新にアメリカは、支那より相当額の銀を買入れ、その代わり不活動金勘定から金を支払う旨を明らかにした。これは支那通貨の安定を助け支那中央銀行の金準備を豊富にするのを目的とすると発表されたが、金は現送しないで支那の在外金勘定に繰入れられることになっている。右声明において注目されることは、

よ明瞭にしたこと。

二、アメリカは百二十三億ドル金を擁し金の氾濫に苦しんでいるが、中でも昨年末創設された不活動勘定は、政府が借金して金を買入れ、しかもそれを死蔵するという矛盾したオペレーションをやっているのであって、その結果二十億に近い金を死蔵するに至ったが、この金を有利かつ政治的にも極めて効果的に使う方法を発見した。

この二点である。

〔ワシントン九日発同盟〕 財政部長孔祥熙氏とモーゲンソー財務長官との共同声明要旨左の通り。

両国政府は米支通貨関係の安定に資するため、かつ支那中央銀行の金準備を充実するため、次の諸項につき意見の一致をみた。

一、国民政府は米国政府より「相当量」の金を購入する。

一、これに対し米国政府は一九三六年五月の米支銀協定に基づき既に購入したもの以外、さらに国民政府から銀を購入する。

東京朝日新聞（第二号外）

昭和十二年七月十一日 発行

日支間重大危機・まさに一触即発

重大廟議遂に一決

きょう声明を發せん

政府は北支事態の重大化に鑑み、帝国政府の態度決定のため重要協議を行なうに決し、十一日午前十一時半米内海相の首相官邸に入るを待って近衛首相、広田外相、杉山陸相、米内海相、賀屋藏相の五相会議を開催、政府の根本方針に関し凝議、午後一時半右五相会議を終わり、同二時より緊急閣議を開き五相会議において決定した成案を付議正式に廟議を決定した。右廟議の決定については近衛首相より上奏御裁可を仰いだのち、政府は帝国の態度を中外に声明する方針である。

五相會議実 に二時間

第一部 日本側資料

〔十一日午後二時政府発表〕 近衛首相は十一日午前十一時半首相官邸に入り、直ちに陸軍大臣、外務大臣、海軍大臣、大蔵大臣の四相とまず個々に熟談したのち、午前十一時三十分より右五相膝を交えて午後一時三十分まで熟議を凝らし、閣議にはかるべき成案を準備した。この成案は午後二

時全閣僚の參集を求めて閣議にはかることとなった。

殆んど最後の案提出

残るはただ支那の誠意

〔北平十一日發同盟〕 十日夜來の日支折衝において新しい停戰協定と事態不拡大の取極めが討議されつつある。同折衝について日本側は殆んど最後の案を提出し、諾否は全く支那側の誠意如何によるという場面に到達している。この努力は九日夜以來頻發した撤退地域への不法侵入の結果、前線における兩軍の紛争絶えず、九日午前三時成立した停戰申し合わせが一片の反古化される現状に鑑み、その後の新事態に即した新たな取り極めをなさんとするものである。

〔南京十一日發同盟〕 北支事件に関する本省よりの第三次訓電は十一日午前日高參事官のもとに到着した。同訓電は「十日夜の第三次衝突は度重なる支那軍のわが方に対する挑戰的行為によって惹起されたもので、全くその責任は支那側にあるを以って、わが方としては適切な手段を執る權利を保留すべし」というにあり、日高參事官は十一日中に王寵惠外交部長及び何応欽軍政部長を訪問し右訓令に基づき嚴重申入れることとなった。

參謀總長宮奏上

閑院參謀總長宮殿下には十一日午前九時五十二分東京駅御発、十時五十一分逗子御着、葉山御用邸に伺候遊ばされ、北支事件に関し統帥事項につき奏上あらせられた。

第三艦隊警備に就く

十一日早朝第三艦隊は北支、中支、南支一帯のわが居留民保護及び權益擁護のため一斉に警備の位置についた。

〔上海十一日發同盟〕 旗艦〇〇に坐乗して南支巡航中だった長谷川第三艦隊司令長官は、今次事件の重大化に鑑み、急遽予定を変更して十一日早朝六時当地に帰港、直ちに大川内陸戰隊司令官、本田海軍武官を旗艦〇〇に招致して事件経過及び現地情勢につき報告を聴取し、在留民の保護並びに現地海軍としての対策につき協議した。

後宮軍務局長報告

後宮軍務局長は十一日午前九時十分近衛首相を永田町の私邸に訪問、北支の状況を報告辭去した。

支那駐屯軍司令官更迭

香月清司中將を親補

北支事件の重大化に鑑み、かねて病氣静養中の田代支那駐屯軍司令官の更迭が行なわれることと

なり、十一日午前十一時三十分陸軍省から左の通り発表された。なお親補式は行なわれず、職記の伝達が行なわれる。

補支那駐屯軍司令官 陸軍中将 正四位勲二等功五級 香月清司

參謀本部付被仰付 支那駐屯軍司令官陸軍中将 田代皖一郎

免本職並兼職 教育總監部本部長兼陸軍將校生徒試験常置委員長 陸軍中将 香月清司

小雨衝いて

香月中將立川を出発

〔立川電話〕 支那駐屯軍司令官に親補された香月中將は眉宇に緊張の色をただよわせ、十一日午前十時見送りの本部員らと自動車をつらね立川飛行五連隊に到着、一旦將校集会所に入り、天候回復を待っていたが、意を決し、小雨降りしきる同十時五十五分陸軍大型機に搭乗、立川飛行場を出発した。

政・財・言論界と協力

政府は十一日の閣議で北支事件に対する方針を決定したのち、午後三時より政務官會議を開催すると共に貴衆兩院議員、財界、言論界等に対しても何等かの方法を以って協力を求めることとなった。

海軍軍事參議官會議

海軍では十一日の閣議で北支事件に関するわが根本方針決定後、直ちに霞が関海相官邸に軍事參議官會議を開き、伏見軍令部総長宮殿下を始め奉り、米内海相ほか各軍事參議官列席の上、米内海相から当日の閣議で決定した方針を説明したのち、海軍のとるべき態度について種々協議した。なおこれに先立ち十一日午前四時半から海相官邸に米内海相、島田軍令部次長、山本次官以下參集、省内首脳部會議を開きその後の情報を中心に種々凝議を行なった。なお支那におけるわが居留民は上海三万、青島二万、天津一万、揚子江沿岸五千、南支五千であるが、第三艦隊はすでに警備配置につき居留民並びに權益保護に万全を期している。

支那軍統々北上

危機刻々に迫る

〔天津特電十一日發〕 支那駐屯軍司令部午前十時半發表。

一、平漢線方面の支那軍は漸次北上を開始し第五十三軍長万福麟の部隊は保定より涿県琉璃河方面に、商震部隊は彰德、順德方面より石家莊、保定の間に、さらに中央軍の劉峙部隊は開封、鄭州方面より衛輝、順德付近に向いそれぞれ移動中なり。

二、かねて平津地方において極秘裡に布置せられありし藍衣社は、ついに各県においてその仮面

を脱し活発なる活動を開始し、共産党系学生のアジ工作と相呼応し一般民衆学生の抗日氣勢をますます激成しつつあり。

三、わが第一線部隊は目下その主力を以って蘆溝橋東側付近に集結して支那側の挑戦不法行為を嚴重監視し、隨時鉄鎚を加うるの体勢にあり。

〔上海特電十一日発〕 北支情勢が再び重大化したるにつき支那側も非常な緊張を呈し、十日本事件のため重慶より急遽南京に帰った軍政部長何応欽氏は同夜直ちに軍事會議を開き津浦沿線、隴海線一帯の軍隊に動員待機令を下し、特に津浦線方面は軍事責任者第一軍長胡宗南氏には重大指令がなされたほか、河南の中央軍は山西に入るべき体勢をとっている。一方、十日夜北平市長秦德純氏に急電を發し、

一、いかなる日本側の要求条件も接受すべからず。

一、一歩も軍事並びに政治的の後退を許さず。

一、必要の時の犠牲の準備をなせ。

と三項の指令を發した。上海各新聞はこぞって事態の再重大化を日本軍の非行にありと宣伝し、みちは抵抗反撃の一にありと強調、氣勢をあげ煽動している。

“軍事行動の停止

二十九軍に命令”

外務省へ公電〓董科長の回答

十一日外務省に到着した公電によれば、十日午後十一時半南京政府外交部董とう日本科長より、わが大使館日高参事官に宛て、北支の事件は事態拡大の状況であると支那側の觀察を電話を以って申越して来たので日高参事官は、

支那側が現場における戦闘行為を停止することが第一の急務となること

を告げたところが董科長は、

冀察政務委員並びに第二十九軍に対し軍事行動をとらぬよう申送るべき旨を返答した。

二十九軍陣容

第二十九軍は第三十七師、第三十八師及び直轄隊よりなりその総兵力は約八万であるが、その編成内容は左の如し(葛西注〓〇印判読不能)。

●第三十七師〓馮治安(西苑)

一〇九旅〓陳春榮(保定)

二一七团〓胡文郁(保定)

二二五团||張文海(南苑)
二二六团||崔振倫(廊房)
一一四旅||董升堂(韓家○)
二二七团||○幹三(南苑)
二二八团||○光遠(韓家○)
独立二六旅||李九恩(馬廠)
六七六团||馬福榮(馬廠)
六七八团||朱春芳(滄県)
◎第二十九軍直轄部隊
特務旅||孫玉田(南苑)
一団||許炳亞(南苑)
二团||○○○(南苑)
独立三九旅||胥元武(北苑)
特務团||○○○(北苑)
七一五团||張景福(北苑)
七一七团||随文波(北苑)
独立四○旅||劉汝明兼任(張家口)

二一八团||孫長坡(保定)
一一○旅||何基○(西苑)
二一九团||吉星文(西苑)
二二○团||謝世全(西苑)
一一一旅||劉自珍(航空署)
二二一団||房世苓(第八医院)
二二二团||張子鈞(○壇寺)
独立二五旅||張淩影(西苑)
六七三团||胡慶華(西苑)
六七五团||王為賢(西苑)
特務团||張振華(西苑)
◎第三十八師||張自忠(南苑)
特務团||阿克波(南苑)
一一二旅||黃棲羅(小站)
二二三团||李金振(小站)
二二四团||張宗○(大沽)
一一三旅||劉振三(廊房)

七一八団Ⅱ尹士喜（延慶）

七二〇団Ⅱ吳連傑（懷來）

◎第二十九軍騎兵部隊

騎兵第九師Ⅱ鄭大章（南苑）

一旅Ⅱ張德順（涿縣）

二旅Ⅱ李殿林（南苑）

騎兵獨立第十三旅Ⅱ姚○○（宣化）

藍衣社暗躍

背後で操る毒牙

北平より確實なる筋への情報を綜合するに、今回の蘆溝橋事件の背後には藍衣社の影響があるものの如く観測される。すなわち平津地方支那軍隊の日本駐屯軍に対する態度が、最近著るしく悪化した背後には藍衣社が動いており、藍衣社社員は一昨年（葛西注Ⅱ昭和10年1月）5月の反滿抗日事件五十数件）以来、北支より姿を消していたが、最近に至り再び続々と入りこみ、これら藍衣社員の陰にかくれた煽動、悪宣伝が今回の事件に大きな関係をもっている。

去る六月下旬平津地方では日本人が何か事を起こすべく陰謀中であるとの謠言が伝えられたが、同時に藍衣社系がテロリストの戦術に出るとの噂が流布された。

六月二十五日から七月三日に至る間、北平市内外には非常警戒が実施され、非常警備配置の演習がしばしば行なわれた。従って今回の蘆溝橋事件が勃発しても冀察当局は狼狽の色なく、市内の警戒配備が水も漏らさず迅速に行なわれた。

なおまた南京政府は事件勃発以来、冀察当局に対し激励の電報電話をよせ、要すれば中央軍四箇師を以って増援の用意ありと通報したことが発覚されたと。

前線に激励

上海の抗日団体結束

〔上海十一日発同盟〕 当地抗日団体の尤（葛西注Ⅱトップ・クラス）たる上海市地方協会は十日、第二十九軍司令部宛て、同軍が国土防衛のため活躍したことを感謝し、引き続き奮闘を祈る旨激励電を発し、また上海市商会、銀行公会、錢業公会の三団体は共同で前線慰問のため銀一千元を拠出し、宛平県城の守備に当たれる吉星文部隊に宛て送金した。

その他各種の「抗日第二十九軍將士を激励するの歌」等が各支那新聞に大々的に掲げられ、第二十九軍を以って国土防衛の愛国義軍としてこれを讚美応援する声がようやく全国的に起こらんとしており、今回の事件が全国的世論の支援を得て国民の排日結束を固めている点は、従来の北支諸事変とは全く趣きを異にしていることが注目されている。

上海から国防資金

〔天津特電十一日発〕 上海市政府では歴代市長の銅像建設のため市民より多額の寄付を集めていたが、十日そのうち一万元を二十九軍慰問金として贈ることに決定、「二十九軍は抗日救国のため全力を尽くされたし」との激励電報と共に送金してきた。

支那側強弁

本末顛倒の抗議提出

〔南京十一日発同盟〕 外交部亜洲司日本課長蕭道寧氏は外交部長王寵惠氏の代理として日高参事官を訪問し、口頭を以って、

第三次日支衝突事件は日本軍が一旦成立せる停戦協定を無視して撤退を肯ぜず、わが軍に不法攻撃を加えたことに起因する故、至急戦闘行動を停止せしめるよう、本国政府を通じ現地部隊に伝達されたし

と本末顛倒の抗議を提出した。日高参事官はこれに対し、支那側ニュースの報道が事実と相違せる点を指摘し、断乎右抗議を一蹴した。

支那決意強硬

伊国の観測

〔ローマ特電十日発〕 十日夜の北平郊外における第二次日支両軍衝突に関し、ローマ政界は次の観測を下している。

すなわち十日の第二次衝突は、一旦妥協が成立したのち支那側から火蓋を切った点から考え、支那側としては相当強硬な決意をもって攻勢に出たものとみるのが妥当である。特に南京政府から一部動員令が下ったものと考えられる節があり、四箇師の増援はこの辺の消息を暗示しているものといえよう。支那側のこの攻勢の背後にソ連があるか否かは不明であるが、黒竜江事件を通じて示されたソ満国境における不安状態が、何らかの意味でこの衝突の導火線となっていることは想像できる。いずれにしても今回の日支衝突は事態相当複雑しており、単なる出先軍部の小ぜり合いとみることは危険で、今後の成行きは注目に値する。

世界知識（臨時増刊）

『支那事変に対する世界輿論の動向』

（資料は主として外務省週刊時報による）

昭和十三年二月五日 発行

蘆溝橋事件勃発す

▼立報（七月九日）

蘆溝橋事件は日本軍の不法攻撃によって生じた。北支の戦亡は単に北支の問題でなくして全国の大問題である。（以下略）

▼晨報（七月九日）

今回の事件は明らかに日本軍の計画的行動であることがわかる。日本軍事当局は国内の不人気を他に転嫁せしめんが為に再び侵略行動に出たものである。（以下略）

▼新聞報（七月九日）

事件発生後わが当局は外交手段によって解決せんとしておって少しも挑戦の意思はない。しかしながら日本軍が敏速に撤退せずして改心の情なき時は、支那軍は自衛権の発動また国土保全のため唯防禦あるのみである。決して威嚇に屈してはならぬ。

▼大公報（七月九日）

冀察当局は外交的折衝によって之を解決せんとし、吾人もまた国権の喪失に亘らないかぎり事態の拡大を望むものではないから、宋哲元は速かに北平に帰りてこの対策を講ずるの必要がある。国民は中央地方ともに団結協力し、国策の存するところに基づいて之を後援すべきであるから、節制ある態度を以って実効を挙ぐるよう行動せられんことを望む。

▼益世報（七月九日）

日本に対して、支那の無抵抗主義が過去のこと属し、土匪、浪人、便衣隊等による政策が窮極

において破滅を招来することを深く認識し、対支政策を国際道徳の範疇に立脚しない以上は徒らに我国民の怨恨を重ねて、いかに北支経済合作に奔命しても徒勞に終わらんことを忠告す。

▼実報（七月九日）

（前略）日本はここ数年来の政策を翻然改めて、最近に至っては近衛公組閣に成功し、川越大使再び赴任せんとして何れも中日関係の調整を唱道したが、之が調整方式にして本事件の如きものとせんか、吾人はただ徹底的対策を為すのみである。むしろ玉碎するも瓦全を欲せざるものなり。

▼世界日報（七月九日）

本事件の発展は予測し得ないが、近衛内閣成立して中日関係好転の空気濃厚の秋に当たって日本側が突然事を起こしたことは、平和を愛好する中国人士の遺憾とする所であることは勿論、日支関係の調整を頻りに提唱する日本側識者の痛惜する所である。幸いに事態は未だ收拾困難なる点までに達していないから、日本側が他に重大企図を有しない限り速かに解決し得らるものと思われる。（以下略）

▼中山日報（七月十日）

日本はさきに南京において蔵本失踪の際、擅に謠言を作って抗議したるうえ兵を動かし、その輕挙妄動は天下の物笑いとなったが、今次蘆溝橋事件において「銃声を聞く」「一名行方不明」という理由で擅に入城した。九・一八の先例に似て公理公法を無視するものである。日本は政治紊亂し、軍費膨脹、物価騰貴等で、民衆は極度に不安に陥り、政党財閥等の倒閣運動がまた起こらんとする

秋に、少壮軍人は現在のファシスト政権維持のために民衆の眼を外方に向けんとし、外方に対し事を構えんとしているもので、今次の事件もその底意に出たるものであって、もし本件が拡大するときは東洋平和の維持は四億中華民族の生命を共にして決定せらるるであらう。

▼広州日報（七月十日）

中国の統一久しからず東北四省未だにわが手に帰らず、平津一帯敵に蹂躪せられている際、また日本軍隊の攻撃を受けたと聞くからには、国民は今こそ起って敵侮禦に邁進しなくてはならぬ。

▼環球報（七月十日）

日本軍は演習中一兵卒行衛不明となり、また銃声を聞いたと県城の捜査を無理に要求し、わが方が之を拒否するや自衛と称して前進したるもので、その故意挑戦は至って明らかである。（以下略）

▼群声日報（七月十日）

華北の軍民同胞が予てより日本軍の鉄蹄下に蹂躪をうけていることは、吾人の痛く憤激する所であるが、川越大使が国交調整を交渉しつつある際この如き不幸なる事件を惹起したのは誠に失望に耐えない。

▼越華報（七月十日）

日支間の一切の紛争は、武力を以って前驅となしており、この日本の侵略政策を知る者は今次の事件が、恫喝の故智に出たものであることが明らかである。

▼青島時報（七月十日）

蘆溝橋事件に現われた支那軍の力強き抵抗と土着民衆の憤慨は、河北の民心軍心未だ滅びなくこれを証明するものである。（以下略）

▼星光日報（七月十日）

今次の事件の直接原因は、日本軍が演習中不足兵員捜査のため宛平県城入城を強行したこと、その遠因は日本の一貫した侵略政策に在ること勿論であるが、さきに北支交通の要衝である豊台を手収めたる日本軍としては、冀察政権が次第に中央化しようとしている今日、さらに平漢線を支配すべく蘆溝橋に着目したこと当然であって、右両地を日本軍に占領せらるるにおいては、中央と冀察との連絡は完全に遮断せらるべく、この意味よりして本事件は単なる一衝突として看過し得ない。吾人は従来しばしば日支国交改善の声を聞くが、このような事件続発するにおいては日支問題の和平解決は全く絶望というべく、本事件に対してはこの際、華北当局の決意と中央の全幅的援助を希望してやまない。

▼北平・天津タイムス（七月十七日）

思うに吾人は日本及び冀察側が、今直ちに今次事件の首謀者を罷免せずして北平城内及び付近の軍隊入換えによって、一時的妥協により正面衝突を回避しようと努力中であるから、両者の間に一層重要な問題を協議する時間の余裕も生じ、また北平付近における戦闘によって国際的紛争を惹起する危険も免れることとなろう。日支両軍の敵対行為はかくして数週間あるいは数か月間延期せらるべく、結局南京政府は河北の地方的解決を否認する以上は、何事かを為さなくてはならぬ。

▼新沙市日報（七月十二日）

今次事件の発生と事件発展の責任は明らかに日本側にある。日本が飽くまで華北侵略のため事態の拡大を図ろうとするならば、支那軍民は領土の保全と自衛上神聖なる発動を辞せず、十三日、再び事件は日本側の事態拡大によって形勢逆転したが、右は日本側が軍事的手段によって外交の目的を達せんとするものであって、日本が武力を以って来る以上は支那もまた武力を以ってこれに挑戦すべきである。

▼江声報（七月十三日）

日支経済提携を唱えて失敗した林内閣に代わって近衛内閣が出現したが、政府に対する軍部の圧力はますます増大しており、今次の事件において日本は容易に撤兵をなす模様なく、中国もまた易々と城下の誓いをなすようなことはなく、本件は単なる一地方問題として終わらないから、この平和的解決はいよいよ困難である。

〔英国紙〕

▼ロンドン・タイムス（七月十四日）

蘆溝橋事件の是非論の如きはすでに第二義的である。吾人の知る所では、それは神経質な歩哨または不手際な将校の責とみるべきである。日支両国政府の慎重な自制は特筆に値する。不成功だったにせよ、幾度か停戦協定の作られた点のみでも重視すべきだ。現に柳条溝事件の際は停戦協定

の話はなかった。（中略）日本は得る所に比し危険多き戦争を欲せぬであろう。日本は戦鬪に勝ち得ても支那を征服することは出来ぬ。北平併合の如きは得る所少なく招く所は全国的な排日であろう。故に最も賢明にして世界の尊敬と感謝を得る方法は速かに停戦し、蘆溝橋事件真相の調査を開始するにある。しかし、日本の支那人に対する不信、蔣介石の地位及び支那全体の強化、右に伴う支那の公然かつ不謹慎な対日態度硬化等に対する内心の憤慨は、右和協策実現の機会を少なくしている。要するに最後の瞬間に賢明な意見の通らぬ限り、今後相当大規模な敵対行為があるものとせねばなるまい。

▼デリー・ヘラルド（七月十四日）

本事件は明らかに日支戦争に発展する危険がある。日支のみならず世界にとり、極東における戦争は大不幸である。日支戦争を防止し得る最善の方法は、米英両国の速かなる共同動作のみである。

〔米国紙〕

▼ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン（七月十二日）

北平付近で真実のニュースを通信するは殆んど不可能故、北支事変の真相を知るには、日支両国及び諸外国政府の公式発表をよく咀嚼し、種々の宣伝的ニュース中から事実の破片を選択せねばならぬ。停戦協定は成立後二、三時間もたたぬうちに破られている模様だが、これは何も不思議ではない。一度衝突が起れば不規則な支那軍を統制することは困難である。（と述べた後、日本側にお

ける事情を揣摩し)普通ならばかくて停戦協定が出来、相互に面子をつぶさぬよう外交的折衝が行なわれるわけであるが、蔣介石は麾下の精鋭を北上せしめつつあるとの報道が真実ならばそうも行くまい。蔣介石が今真に日本と決戦しようとは思えない。しかし軍隊を北上させるようなことがあれば、紅軍が長らく宣伝し来たった政策に乗るようなもので、支那自身が混乱に陥り、日本軍も深い奥地に広汎な戦線を張らねばならぬ、遂には財政的に行き詰まるであろう。

▼ニューヨーク・デリー・ニュース(七月十四日)

吾人は今事変に対する國務省の慎重な態度を称賛する。満洲事変当時のスチムソン前國務長官の態度が慎重を欠いたことは人のよく記憶するところ、当時ス氏及びフーバー前大統領は英仏の国際連盟における正義の叫びに眩惑され、英仏が利口に影に隠れている間に、米国は単独で抗議を続け、危く日米開戦の危険に直面した。この間、ハル國務長官は今日までのところ上手にやっている。勿論吾人は極東においてもまた平和のために協力するにやぶさかでないが、支那における英仏の利益擁護の手先に今回はならない。英仏は勿論米国の友邦なるも、国際間の友誼には限度がある。もしハル長官がこの態度を堅持するなら多くの米国人に喜ばれよう。吾人は弱者支那に消極的同情を持つが、米国が今次の戦争で積極的に支那側につく情勢は想像できぬ。願わくはスペインにおけると同様、アジアにおいても冷静を失うなかれ。いずれの戦争も吾人の関する問題ではない。

▼サンフランシスコ・ニュース(七月十三日)

最近、支那側が呉淞方面の防備を固め、また北支那方面においては軍用飛行場など軍事施設を行

なって日本の感情を著しく刺激し来たったことが、今次北支事変の原因である。(ジョン・トムソン)

▼バルチモア・サン(七月十四日)

北支における日本の意図は不明であるが、最も重要な点は、支那軍の衝突地帯撤退を要求していることである。今度は南京政府も強気に出た。これは蔣介石が真に抗日を決意せるを示すものだ。

〔ドイツ紙〕

▼ベルリナー・ベルゼン・ツァイツング(七月十日)

日支両軍衝突の原因は北支民衆及び支那軍隊の中にある抗日気分である。すなわち冀察政務委員会が従来慣例を破り、日本軍の演習に異議を申立てたとすれば、右の抗日気分がねした結果である。

▼ドイッチェ・アルゲマイネ・ツァイツング(七月十二日)

今日の歐洲人は全く傍観者となり、昔なら恐らく介入したはずの極東の事態に対しても、今日は全く「平静だ」と考えている始末だ。(以下略)

〔ポーランド紙〕

▼ガゼータ・ポリスカ(七月十七日)

今次事件は日支両国間の問題に止まらず、その政治的意義は更に深いものがある。問題の重点はソ支間の関係であるが、第一に不可解なるは支那側の態度である。北支政権が日本と和解せんとするに拘らず、南京はかえって事態を悪化せしめさかんに戦争準備をなしている。もし外蒙乃至新疆においてソ連に対してのみ同様の態度に出たるものとすればともかく、日本に対してのみかくことごとく強硬態度に出るのは、明らかに黒竜江事件と今次事件とが関連せることを示すもので、ソ連は支那における共産主義宣伝を抗日国家主義宣伝に代え、以ってソ支共同して日本に当たらんとするのであるが、このソ支共同工作はかえって日本国内世論の統一と国民の挙国一致を助長した点で失敗といわねばならぬ。故に南京も万一对日本戦争に成功しても、北支がやがて外蒙と同様の運命に陥り、かつ国民党に代わり赤色政権が支那を支配するに至るべきを洞察し、ソ連の混言に迷わされざるよう自覚するを要する。けだし日支戦争はその結果いかに拘らず、支那国民の自殺行為であらう。

〔アルゼンチン紙〕

▼ナシオン（七月十五日）

一九二二年以来、ソ連が極東において行なった共産主義の宣伝は、日本として国家存立上嚴重なる防共措置を講ずるに至らしめ、まず満洲国の建設となり、次いで北支の分離運動となったが、長城、黄河間を日本勢力下におく時は、日ソに武力争闘勃発するであらう。

〔葛西注〕

以上、外国紙二十七紙のうち、最もの確に蘆溝橋事件の本質と未来への展望を述べたのは波蘭（ポーランド）紙『ガゼータ・ポリスカ』（七月十七日）一紙だけであった。

中国紙は一紙もの中したものがなく、わが国的中紙『毎日新聞』（関公平記者。本書二二九頁）一紙のみと共に、哀れな現象といえよう。新聞論調はおおむね当たらないもの、という見本である。

世界知識（臨時増刊）

『支那事変に躍った人物』

昭和十三年二月五日 発行

〔日本人側〕（抄録）（板津直光記）

近衛文磨Ⅱ青年宰相。見るからに上品、インテリ型で革新的なところが若い人々にもてる。思想的哲学的な深みがあり、とくに父君霞山公に薰陶されたため、対支政策に一見識をもつ。事変直後、自ら蒋介石と談じあい大所高所から支那問題を解決せんとした。

杉山元Ⅱ陸軍大臣。漠然として捉えどころないのが価値あるところ。

米内光政Ⅱ海軍大臣。颯爽、無敵日本艦隊を象徴するもの。

広田弘毅Ⅱ二・二六事件直後の難産内閣の首班者。非欧米派で国士風的な人物。外務大臣。

賀屋興宣〓大蔵大臣。生えぬきの大蔵省育ち、官僚出身にしては珍しく太っ腹。
末次信正〓内務大臣。海軍大将。事変に対する強硬論者。

木戸幸一〓文部大臣。侯爵。近衛首相と無二の親友。

吉野信次〓商工大臣。重要な発言権を有す。

大谷尊由〓拓殖大臣。将来、支那事変に重大な役割りを行うかも知れぬ。

中島知久平〓鉄道大臣。飛行機製作で事変と直接関係あり。政党の代表である。

永井柳太郎〓逓信大臣。電力国家管理案で事変と直接関係あり。政党の代表である。

故・馬場鏐一〓内相。近衛首相の相談相手で種々の建策をなし、内閣参議制度の実現は有名。

宇垣一成〓陸軍大将。内閣参議十名の筆頭で、十名が一堂に会し国家の根本政策を談論する光景は事変中の豪華版である。

郷誠之助〓財界の大御所。男爵。

池田成彬〓金融の大物。前日銀総裁。三井の池田で知らる。

町田忠治〓民政党総裁。徳の人。

前田米蔵〓政友会代行委員。智の人。

松岡洋右〓満鉄（南満洲鉄道）総裁。国際連盟脱退当時の立役者で横紙破り的な存在。

秋山定輔〓近衛公の先代より因縁浅からぬ策士。

秋田清〓十人の参議のなかの一人。陰の人である。かつて犬養木堂の革新党を政友会に売り、現

在は既成政党、小会派、無産党までも一丸とする合同を企つ。最近は衆議院議長として

日支問題に一役かわんとす。

鮎川義介〓日産の鮎川。

津田信吾〓鐘紡社長。

十河信二〓興中公司社長。

〔外人側〕（抄録）（鈴木東民記）

ナッチブル・ヒュウゲッセン（前英国駐支大使）〓支那事変勃発以来の彼の大車輪の活動は有名で、戦火の南京、上海間の途上で飛行機の機銃掃射を浴び負傷し、更迭さる。西安事変の際、南京と張学良の間の調停を必死になって行なった。万一調停失敗の際は張学良を外遊させるべく、イギリス軍艦を某所に待機させたりした。日英同盟が失われた後は、国民政府を強化して日本と対抗すべく努力した。

ノーマン・デヴィス（九国条約国会議アメリカ代表）〓実業界の出。財務次官、國務次官等を歴任した。六十歳。

オスカー・トラウトマン（ドイツ駐支大使）〓六十一歳。駐神戸総領事、東京大使館員を経て帰国。外務省東亜部長から駐支大使となる。国際法が専門、東洋美術の造詣すこぶる深し。

W・L・ドナルド（南京政府私設顧問）〓前身は新聞記者。西安事件以来一躍有名となった。裸一

貫の支那風雲児。張作霖の顧問をつとめたこともあり、張學良外遊のときはお伴をした。

ドミトリ・ワシリエヴィッチ・ボゴモロフ（ソ連駐支大使）Ⅱ一九二〇年の夏から開始されたソ連と支那の復交交渉は一九二四年にやっと妥結、ソ連代表カラハンと支那代表顧維鈞が調印した。しかし一九二七年、北京政府（葛西注Ⅱ張作霖政權）の共產主義運動弾圧に際し支那側が北京のソ連公使館を襲撃、ソ支国交は断絶された。その後、一九三〇年五月モスクワでソ支復交会議が開かれたが、支那側がハバロフスク協定の無条件承認を拒否したので決裂。

満洲事変勃発で支那側は日本の行動を牽制する必要からソ連との復交を急ぎ、当時モスクワに在った王曾思を代表に、ソ支不侵略条約の締結を条件に復交を提議させた。その結果、一九三二年十二月ソ支国交回復し、翌一九三三年四月、駐支大使としてモスクワから南京に派遣されたのがドミトリ・ワシリエヴィッチ・ボゴモロフである。だが、ボゴモロフ着任と同時に引続き交渉される筈だった不侵略条約の件は、支那側の逡巡のため進展しなかった。ところが、待てば海路の日和（？）で支那事変が勃発、支那はソ連との接近を必要とするに至った関係から、今度は支那側が不侵略条約締結を焦りだした。今までさんざんじらしぬかれていたボゴモロフは、支那事変という絶好のチャンスをつかんで、遂にソ支不侵略条約の締結に成功した。

ソ支不侵略条約の背後には軍事密約があるという噂も伝えられた。彼は四十八歳の少壮外交官。

〔支那人側〕（抄録）（波多野幹一記）

蒋介石Ⅱ軍事委員会委員長。事変以来の動きはフにおちぬことばかり。一時の賢明さは全くみられず、病竜の末路哀れである。

孔祥熙Ⅱ行政院長兼財政部長。宋閥の代表者宋子文をしのぐ実力者。支那要人で最初に主和論を唱えた。

宋靄齡Ⅱ孔祥熙夫人。男まさりのラッ腕家といわれる。

宋美齡Ⅱ蒋介石夫人。哲婦という言葉がピッタリ。西太后、淀君といったところで、南京を滅ぼした女として後世に名が残ろう。

宋子文Ⅱ経済委員会委員長。支那第一の財政家。最近香港にいますが、蔣との間に溝ができたか。

陳立夫Ⅱ教育部長。兄の陳果夫とともにC・C団の首領。共産党嫌いで、将来国・共分離といった場合は反共の中心となるだろう。

陳誠Ⅱ青年軍人派首領。四十三歳。保定軍官学校卒。主戦派の首領でもある。最近馮玉祥にかわって京漢線方面の戦区総指揮に任ぜられたようだ。

胡宗南Ⅱ第一師長。黄浦軍官学校卒、四十四歳。蒋介石直系軍中第一の勇将で、共産軍中の勇将

徐向前も胡宗南が苦手。毎度手痛くやられていることは有名な事実。

張治中〓湖南省政府主席。保定軍官学校卒。第一次上海事件で日本と戦い、今度もまた上海で戦ったが、国府分散遷都前、何鍵に代わって湖南省政府主席となった。四十八歳。

何応欽〓軍政部長。蔣介石に次ぐ軍の実力者。著名な知日派。準備不足を説いて主戦論者をおさえていたが、血気にはやる青年軍人に押しきられた。

張群〓行政院副院長。抗戦の無謀を最もよく知っている男。

翁文灝〓経済部長。ベルギールヴァン大学卒の博士。支那有数の地質学者。経済手腕は未知数。

張公権〓交通部長。慶応卒。中国銀行の主で、浙江財閥のブレーン。

汪兆銘〓国民党元老。武の何応欽に対し、文の汪兆銘といわれる。主和論者。

陳公博〓汪派の領袖。事変後イタリアで外交活動をしているが、成果なし。

白崇禧〓広西派の領袖。支那第一の軍略家である。一身の理財につとめず、支那では希にみる高潔な男。

李宗仁〓広西派首領。白崇禧を使いこなしていることで、その器は想像されよう。

陳済棠〓元広東の実権者。割拠軍閥の最大たる広東派の首領であったが下野外遊。事変後コソリ帰国、李宗仁を頼って捲土重来を策す。

閻錫山〓山西派首領。共産軍の山西侵入で中央軍の援助を乞い、南京に頭が上らなくなった。

韓復榘〓旧山東省政府主席。もと馮玉祥下の猛将だったが、一九二九年馮が反蔣戦を起したとき、

うまく見切って蔣介石につきトントン拍子で山東省主席になる。反日風潮にも雷同せず、山東省を北支の模範省としたが、今回の事変で蔣の隠し目付けたる蔣伯誠に牽制され、ついに山東の日本権益破壊をやり、あげくのはて敗戦の責を負わされ銃殺された。

孫科〓立法院長。孫文の長子。中ソ文化協会長。抗日人民戦線派のシンパでソ連の積極的援助を懇請。

馮玉祥〓軍事委員会副委員長。北方旧軍閥から国民党へ転向。それでいながらいく度か反蔣戦発動。また著名な抗日家でもある。しかし力はない。

于右任〓監察院長。孫科、馮玉祥と共にソ連派の首領。共産党の温床といわれた上海大学の校長をやり、娘も共産党員になったという。事変後、共産党員はみな于の宅を根城にしている。

陳銘樞〓十九路軍産みの親。陳済棠の以前に、広東の実権者だった。一九三三―四年の福建革命後、急速にモスクワに接近。

蔡廷楷〓旧十九路軍首領。第一次上海事件で日本軍と戦った十九路軍の総指揮者が病気で、軍長の彼が指揮した。一員の虎将。抗戦失敗を露骨にいった最初の男。

李濟琛〓旧広西派首領。当世の奸雄。蔣介石が国民革命軍を率いて北上したとき留守居役として広東を預り、蔣が北伐に成功すれば当然広東を貰うし、失敗すれば蔣を広東から締め出す算段をした。その上、弟分の李宗仁軍の給養をよくし、白崇禧を国民革命軍参謀長代

理（參謀長は李濟琛本人）にし蔣を監視させた。計画図にあたり、北伐成功当時には広西派の勢力範囲は、広西、広東、湖南、湖北の四省に及んだ。そこで必然的に蔣との争いになり、広西派の若殿様である胡宗鐸が武漢で火蓋を切ったが、早すぎて失敗。李濟琛は蔣介石に監禁。満洲事変後釈放されたが、広西でも迎えられず、陳銘枢らと福建革命を起したが失敗。今度の事変ではどう動くか。

郭沫若Ⅱ左翼作家の元老。九州帝国大学卒（現・九大）の医学士。日本女性を妻に、支那文壇に新風を起こしたロマンチズムの驍將。共産党に入り、左翼作家の犬として蔣介石から逮捕令が出て、日本に亡命約十年。事変後、逮捕令が取り消され上海にゆき抗日宣伝の中心人物となる。

章乃器Ⅱ人民戦線派領袖。元銀行家。独学の経済学者、論客として有名。一九三六年十一月の上海邦人紡績スト煽動のかどで沈鈞儒、鄒韜奮、王造時、李公樸、沙千里、史良女史らと一緒に逮捕された人民派七領袖の一人。事変後釈放、相変わらず抗日宣伝をしている。

宋慶齡Ⅱ孫文未亡人。姉靄齡、妹美齡とは性格が違い、ロマンチスト。一貫した容共主義者で、蘇州監獄にいる人民派七領袖釈放運動で坐りこみ戦術をやった。

毛沢東Ⅱ共産党首領。恐るべき組織者。共産軍の根拠地たる陝西省北部にいて時々漢口、長沙等に現われているらしい。漢口陥落すれば、共産系の人物や軍隊が蔣とは別になり陝西省に逃げこもうから、毛の計画は至極賢明だ。

周恩来Ⅱ共産党総書記。内訌の激しい共産党で十二、三年にわたって党中央に蟠拠、不倒翁の綽名をもつ政治家だが、その政治家ぶりを最もよく発揮したのが西安事件だった。同事件の三日後にはもう西安に現われ、自由自在の掛け引きで蔣介石を翻弄し、連露、容共、抗日、を約束させた。国共合作交渉で八面六臂の活動を続け、事変後も各地に奔走。最近朱徳が閻錫山の地位にとって代わったそうだが、これらはコミンテルンの意をうけた周の成功を物語る。

朱徳Ⅱ共産軍首領。共産軍の草分けは毛沢東の組織した農民バルチザン隊と、朱の率いる国民党軍崩れの叛乱部隊が合体した紅第四軍である。国民党にじっとしていれば、顧祝同の次の椅子に坐れる男。

陳紹禹Ⅱ王明ともいう。中共モスクワ代表団主席。ソ連の支那通でモスクワ中山大学校長やコミンテルン極東代表をやったりしたミフの片腕。コミンテルンの命をうけて帰国、当時中共を牛耳っていた李立三のコースを猛烈に攻撃、これを引きずり落した功により中共総書記を勝ち得た男。その後モスクワに戻り中共代表団主席。抗日人民戦線理論の最高組織者。バりに『救国時報』を組織、最近漢口に乗りこみ、党機関紙『新中国日報』を創刊したという。

新聞協会編

『日本戦争外史——従軍記者』(安藤利男『通州脱出の記』)

全日本新聞連盟 昭和四十年九月十日 発行

通州事件(昭12・7・29)

私も砲声いんいんとつたわる北京をとびだし、一文字山戦場へかけつけ暗夜にひらめく砲火のなかに、短軀豪胆美貌の北京歩兵隊司令官河辺正三少将が泰然と丘に立つのをみた。また戦場の一隅で戦闘直接指揮の連隊長牟田口廉也大佐が、

「兵を死なせてすまない。北京へもどったら居留民のみなさんにわびて下さい」

そのときの鬼連隊長の目がぬれていたのをわすれていない。

二十六日には豊台から来て北京の广安門へ入城する日本軍部隊のトラック頭上へ、守備の二十九軍部隊が手榴弾を浴びせた。制止にあたった冀察政府の軍事顧問桜井徳太郎中佐が、銃火のなかから城壁をとびおり重傷を負ったのもこの時である。北京―天津間を走る京津鉄路も廊坊の日華両軍衝突で不通となり、北京城内の一般居留民は安全地帯の大使館区域へ急いで退避した。

天津の日本租界も二十八日深夜から中国側の急襲をうけた。居留民義勇軍はバリケードを死守し、

かろうじて突破をまぬがれた。婦女子は屋根裏や押入れにかくれ、窓はふとんを釘づけにして銃弾をふせいだ。通州へたつ前、天津にのこした妻子も屋根裏にいた。天津襲撃が通州の深夜の叛乱とおなじ時刻だったのも中国軍の一斉蜂起をものがたる。京津線がダメになったと知った私は、通州北京街道をかえろうとしていた。

ちょうど天津から通州へ軍需品を輸送する藤田部隊があったのを好都合に、相沢カメラマンと一緒にトラックにのりこんだ。それは通州事件がおきた前日の七月二十八日のひるである。

ところが通州として日華の衝突は例外でなかった。二十七日払暁には、新南門外通宝寺を兵営とする宋哲元二十九軍一部隊を日本軍通州守備隊菅島部隊が攻撃、激戦があった。

二十九軍を追いはらうと菅島部隊は、北京南苑方面に転進、残ったものは通信兵、憲兵、兵站などせいぜい百名ちょっと、通州の日本軍主力は留守同然だった。それにいまひとつまずいことに、通州事件誘発の直接のキッカケとして見落せない日本軍航空部隊の誤爆事件というのがおきていた。これは二十七日の二十九軍攻撃のさいに飛来した日本軍の飛行機が、二十九軍兵営と境を接する通州冀東保安隊幹部訓練所をまちがって爆撃したと説明される事件である。幹部に数名の死傷者が出て保安隊側は激昂した。味方と信じていた日本軍から爆弾を見舞われたわけである。

冀東指導に専念していた通州の日本特務機関長細木中佐は窮地にたった。股長官と機関長は青くなって保安隊幹部の説得慰撫に心胆をくだいた。保安隊側の動揺一応おさまったかにみえたが、日本軍に対する疑惑の雲は通州をおおっていたのである。私は二十九軍との戦闘のあとにしては、案

外平静だと思ひながらこんな不穏な事態がひそんでいたとは露しらず取材してまわった。(中略)
近水楼の一階玄関に近い大部屋には蚊帳のなかに夜具だけが敷いてあった。私は一人ごろ寝をした。漠然とした不安がひろがり、深夜になってもあつくてなかなか寝つけなかった。近水楼は静まりかえっていた。

風がときどき蚊帳の裾をわたった。わずかの眠りにおちた時は、いつか惨劇の二十九日にはいつていたのであった。

はげしい銃声！ 私は飛び起きた。午前四時。また一発。玄関口の電話機にとびついたが線はもう切れていた。

あかつきの銃声は連続して一発一発がはっきりと聞きとれる。政府の方角から頭上をおそってくるようだ。

二十九軍敗残兵の逆襲か？ 保安隊の応戦か？ 昨夜来の漠然たる不安と予感！ まさかそれが冀東保安隊自体の叛乱であるとはまだわからなかった。曉暗に外出はあぶない。見合わせた。宿でも次々とみんな起きてきた。

やはり多勢泊まっていたのをしって心強く思った。どの顔にも驚きの色はあるが、まあ、たいしたことではあるまいというのが初めの観測だった。朝はようやく白んだ。

道路へ出て左右を見たが人の動く気配はみえない。五時半頃、ただ一人、無帽丸腰の中国兵が近水楼の前を市街地の方へ通りぬけた。伝令であろうか、それにしても情況は全くわからない。銃声

はやまない。

七時半ごろだった。

二階から大声があがった。

「街の方が燃えていますよッ」

兵営、特務機関、邦人家屋のかたまっている方を二階の窓から眺めると、いくつもの煙りがあがっていた。事態が容易なものでないことが、私たちにわかったのはもう九時ごろだった。外泊していた近水楼のボーイが玄関からかけこんできた。

「大変だッ！ 保安隊の兵隊が特務機関や日本人の家を襲撃している。ここもあぶない！」

「保安隊が？ ホントか！」

みんな驚いた。私の予感の姿はこの事であったのだ。(中略)

のぼりつめた城壁の斜面での私の位置は列の一番上部にあった。自然そうだった。

ちょうどヒナだんに並ぶように七十余名は次々と斜面にたつてドブに面した。するとむこうの建物のかげからいつでてきたものか二、三十名の正規軍装の一隊が列を布いた。そして立て銃の兵の姿勢が音もなく狙えの構えに変わっていったのである。

その時あたりにサッと殺氣が走って、たれか女の叫びがあがった。

「逃げまじょうッ」

緊張を破ったこの叫びと私の脱走とがどちらが早かったか、縄をふりはなした私のからだはもう

城壁の頂上にあった。立ち上がり脚がひどく重かった。

意識は生きていてもこんな場合の人間の生理はスッカリまいていたのだろう。だが、あとは飛鳥だった。手は城壁の反対側の石の突角にかかっていた。胸を壁面におしつけるようにして私のからはスベリ落ちていった。ドスンとこたえたが手にふれるあらゆるつるや草をつかみ、指が石のどの凸部にも、ひっかかりその働きもあって二丈余の城壁を無事にこえた。脱出はできた。

だが、にわかにはひらけた私の解放感にも、わりきれぬ感情が流れていた。私だけが逃げたのだ！その胸をさす悔恨を私はどうしようもなかった。ただ夢中で走るだけだった。

それから私の通州脱出行も、北京の朝陽門外へたどりつくまで四日三晩容易なものではなかった。

二十九日昼北京東方の空に一すじ高い黒煙があがっていた。北京は通州の異変を感じていたが、その日状況はまだ不明だった。

このころ通州の日本兵営は二千余名の冀東保安隊叛乱軍の包囲攻撃にさらされていたのである。

(中略)

城外でチリチリとなった冀東叛乱軍の主力は、おりから進出してきた関東軍精銳にたたかれ西へおちていった。多くは永定河後方の宋哲元軍に合流したであろうし、北京郊外で日本軍に帰順したものもあった。だが、通州はあとのまつりだった。救援の先遣機動部隊が通州西門へ突入したのが翌三十日の午後四時。

「このときすでに目ざす冀東叛乱軍は城内をひき払ってもぬけの殻、あとにのこされたものは夏なお寒い死の廃虚だけだった。将兵は城内に足をふみいれてただ茫然とした。死臭はただよい人影はない。暴虐のあとをみてつき出る言葉もなかった。街のあるところでは日本人家屋の屋根にほおりあげられた子供の惨殺死体があった。足をふりまわして石にたたきつけ、死ぬのを見て投げたものと見られた。襲撃目標のひとつとされた近水楼あとへゆくと、廃屋の床にいくつもの屍体があるがっていた。壁にははぎとられた婦人の頭髮が血のりといっしょにはりついていた。庭先の蓮池には婦人の屍体が二つ三つもう腐爛して水に浮いていた。どこからあらわれたものか、裏庭の一隅に二十名ばかりと思われる日本人男女一団が青ざめた顔をしてかたまっているのを発見、先遣部隊が救出した。どうして生きのびたものか、おそらくこの一群の生存者は街のどこかにうまく隠れおせて、救援部隊到着を知って集まってきたものだったらしい。

筆者らが引かれていった北門わきの銃殺場あとにはドブ池におおいかぶさったザツと百名ちかい死体をみた。そこでの惨たん暴虐のあとはどうてい筆舌につくせない悲惨をこえたものだった」(以上救援先遣隊のある猛将談)

八月二日通州へはいった天津軍幕僚の報告は「城内北側の池で邦人屍体〇〇個を発見したが、どの屍体も残忍の手が加えられ判別するのに困難をおぼえた」とある。(中略)

当時発表された生存者数は内地人男子四一名、女子二四名、子供十二名、合計七十七名、半島人男子十五名、女子二三名、子供二〇名で総計一三五名となっている。通州在留邦人数は三八〇余名だ

ったというから、二百数十名の日本人が兇刃の犠牲となったわけであった。私の氏名はもちろんの発表のなかになかった。

土肥原賢二刊行会編『日中友好の捨石 秘録 土肥原賢二』 第三章 日中戦争までの日中関係より抄録

芙蓉書房 昭和四十九年十一月十五日 発行

張学良の失地回復工作

(葛西注)張学良は昭和11・12・12の容共反蔣事件——西安事件首謀者として南京国府に拘禁、三十八年後の今日も台湾某所に軟禁されている由。なお本稿には冀東防共自治政權、冀察政權という華北地方の親日政權の情勢が記述されている)

一九三二(昭和七年)満洲建国後の日中交流は、中国本土の蒋介石と北支を代表する張学良の対日反抗に対する日本の強圧、または宣撫工作の交錯であった。

先ず満洲より追われた張学良は、最も満洲に近い熱河省に地歩を進めて、失地回復の足がかりとするあらゆる工作を進めていた。

たまたま熱河省長湯玉麟が満洲建国に参加しながらも最終決断に迷い、洞ヶ峠をきめこんでいる

現況に着目し、一九三三年七月の朝陽寺事件(関東軍の石本勲託が熱河義勇軍に錦朝鉄道列車中で連行、後に殺害された事件)につけこんで、張学良は国民政府命令と称して自己の東北軍約四万を八月に古北口方面(葛西注)古北口は映画『白蘭の歌』で後に有名となる満鉄承古線の長城寄り終点)から熱河省に進入させて、湯玉麟に黙認させるに至った。

このような張学良の強硬態度を反映して、満洲と中国本土との国境山海関においても日中衝突事件が続いて発生した。

それは学良直系の何柱国軍の第九旅と日本守備隊との衝突事件であった。日本は北清事変に関する議定書(一九〇一年)に基づいて、フランス、イタリア軍と共に小部隊を駐屯させていたが、三回に渉る衝突が起こり、一九三三年(昭和八年)一月三日、遂に日本軍は錦州の第八師団(西義一師団長)を中核として兵力を整備し、海軍の協力を得て攻撃を開始し、完全に山海関を占領して何柱国軍を駆逐し、石河の線で対峙することになった。

この事件の発生については、何柱国軍がたびたび治安を攪乱する行動に出たので、落合守備隊長が謀略を用いて何柱国軍に挑戦したという説があるが(橋場賢三さんの山海関事件の真実)、参謀本部編の『満洲事変史』によると、次のように記されている。

中国側は第二項(日本軍が南門を一時保持する提案)の受諾を拒否したが、折衝の末、ついに翌二日午前四時五十分になり、漸く南門の明け渡しを受諾した。ところが同日午前九時三十分、第九旅参謀長から、正午に何柱国旅長が北平から山海関に到着するから、日本軍への南門警備委

任は暫く保留してほしいと申入れて来た。しかし落合隊長はこれを拒絶し、中国側に嚴重抗議したので、中国側は旅長帰還まで南門を日本軍の監視区域にふくませることを受諾した。そこで午前十時五十分頃、日本守備隊の一小隊が南門の守備交代を実行しようとしたところ、中国側は約束にそむき、多数の手榴弾を投げて来たので日本側に三名の死傷者を出した。

ところが、一月四日付で中国側から日本側に提出された通告文には、中国側の拒絶により、南門明渡しが無解決のうちに日本軍が攻撃を開始したと述べられている。

この当時の日中兩國第一線の激突が何れに責任があるか不明のまま、戦闘行動にまで進展する過程を端的に示しているものというべきである。(葛西注Ⅱ本件を含めて、現地の小部隊間における日中交渉では、従来一度も双方の問題としてとり上げられたことはないが、通訳、訳文の技術に重大な欠陥があったのではないかと考えられる。これは私の関東軍二年八か月余、中共軍七年八か月余の通訳、訳文の体験からの推察である)

関東軍、熱河から長城線へ

前項のような張学良軍の反日行動は、日を逐ってエスカレートし、満洲領内の熱河省への圧迫が加わると、関東軍がだまっていけないことは当然であった。

一九三二年(昭和七年)十二月に渡満した第六師団は、当初北の警備任務にっていたが、第三

次山海関事件の頃より遼西(奉天の西方地区)に移動し、将来の第八師団と共に熱河作戦の準備に本格的に取り組むことになった。

一九三三年(昭和八年)一月二十七日、武藤関東軍司令官は熱河作戦の意義を訓示して曰く、(葛西注Ⅱ以下、片仮名部分を平仮名に直した)

「熱河省の形勢は日に險惡の度を加え、満洲国礎強化確立のため、今や放任を許さざるの情勢を呈し、関東軍の作戦行動上点晴の要機は正に迫れり。

そもそも熱河省のことたる、もとより満洲国内問題にして、何んら國際的意義を伴わざるに拘らず、その肅清平定は直ちに反満抗日分子のため、致命的打撃たるがため、強いて熱河と北支とを混同視して、正規軍を省内に進入せしめ、ことさらに声を大にして、帝国に侵略的意図があるが如く宣伝し、以って全世界の視聽牽制にこれ努め、関東軍の熱河に対する施策は、一挙手一投足の微といえど國際監視の目標たり」

関東軍はこのようにあくまで満洲国の国内問題であると主張している。

しかし、関内(長城線以南)の河北省に進入することについては大事をとり、二十九日に再び河北省への進入禁止の訓示を出している。これは天皇の御意向を体してのものであった。曰わく、

「熱河経略は純然たる満洲国内問題にして、対支戦争を惹起するは、国策として之を採らざる処なり。別命なき限り、長城を越えて河北省内に作戦すべからざるを示しある所以、またここに存す。諸官宜しく隷下及び指揮下諸団隊に嚴達し、熱河省は満洲領域にして軍の自由に行動し得べ

き疆(境)域なるも、長城を隔つる河北省は中華民國の領域にして、大命あるに非ざれば、軍として作戦行動を許されざる地域たるをわきまえ、局地の情況若くは戦術的利害等に眩惑し、大局を誤まり、国策に反する行動を戒むべく遺憾なきを期すべし。右に關し大元帥陛下御軫念遊ばざるを拜聞し、恐懼重ねて訓示す」

このようにして關東軍は慎重な構えをとりつつも第六、第八の精強師団を並列して長城線への進撃を開始したのであった。

中国側はこの事態に対処すべく、一九三三年一月末、南京において蔣介石、段祺瑞、張学良の三者会談を行ない、中央軍を北上させ、その総指揮を日本の陸大出身の楊杰ようけつに任せた。蔣は共產軍討伐を理由に自ら日本と対決することを避けた。

北上した中央軍は五個師約五万といわれ、後に古北口方面で第八師団に頑強に抵抗した。

このようにして戦機熟し、關東軍は二月下旬から行動を起こし、三月上旬には赤峰、承德、冷口などを完全占領し、一応熱河省内の中国軍の掃蕩は終了し、長城線的主要関門を確保した。しかし、二個師団を基幹とする關東軍は、中央軍の戦線加入による数倍の中国軍に対しては兵力過小であり、各所に關東軍の弱点をつく中国軍の侵入が見られるようになり、關東軍もその源を断つ意味から長城線を越えて灤河らんが東方地区に進出し、遂に長城線を越えてのいわゆる關内作戦に転換せざるを得なくなった。

このいわゆる灤東作戦は、一九三三年(昭和八年)四月十日から十九日までの十日間、撤兵完了ま

での二十三日まで二週間を費やしている。

この情勢を見て蒋介石はいかなる構想をもったか。彼は共產軍討伐に三回失敗し、武漢三鎮に立てこもるソビエト区をとることができなかった。内外に敵を控えた蒋介石は二者択一の方針に迷った末、日本との妥協の道を選んだ。

「安内、攘外」の蔣のスローガンは、外敵をうつために先ず国内を安定するという方針であろうか、彼は三月初旬漢口から保定まで北上したが、ここに止まり、種々の策案をなし、先ず対日最強硬論者の張学良を北平軍事委員会分会長の職から追い、腹心の何応欽に交代させた。

そして三月末汪兆銘(葛西注「精衛は号」)が行政院長に就任し、蒋介石は軍事委員長、参謀総長を兼ねて中共討伐軍の最高指揮官となって政治と軍事の分離をはかると共に、対日融和政策に転換して来た。汪は「一面抵抗、一面交渉」の対日政策により蒋介石と歩調を合わせ、先ず共産党との調整をはかり、対日軍備の整頓をする時間をかせいだのであった。

北平に來た何応欽は、三月半ばより雑多な中国軍を統一指揮し、古北口方面の守りを固めて、關東軍にしばしば反撃しつつ、平津方面に主力を集結して時間をかせいでいた。この時の關東軍の兵力は二個師団であり、中国軍は中央軍の主力だけでも二十個師であったという。

關東軍はこの兵力差より、しばしば中央軍が熱河省内に侵入するので、ここに謀略手段により対蒋介石批判派である従来の華北軍閥將領に働きかけ、彼らに反蔣機運を醸成させる工作をやることになった。(以下略)

天皇の鶴の一声

さて関東軍は、最初の武藤軍司令官の訓示に反し、行きがかり上長城を越えて関内への作戦、いわゆる灤東作戦を強力に推進し、四月中旬には怒濤の進撃を続け灤河の線に進出したが、武藤軍司令官は天皇の御意向もあり、控え目に進撃の限度を指定していた。しかし板垣奉天特務機関長は、張敬堯の反蔣クーデターの時期を四月二十日頃と定め、これに呼応して宋哲元軍が動いて北平の中央軍の脱出を阻止するから、関東軍の陽動作戦を継続してほしいと要望することしきりであった。そこで関東軍は古北口南北地区での陽動攻撃や密雲の爆撃を行ない、奉天特務機関の工作に策応していたのであるが、四月十八日夜半百八十度転換し、一斉に長城に帰還すべしとの命令を翌十九日急遽下達した。ただし、天皇の強硬なる意図が参謀本部を動かしたのである。

この間の事情は次のようにいわれている。

天皇が真崎参謀次長を呼び、

「関東軍は未だ灤河の線より撤退しないのか」

と御下問があり、真崎次長は恐懼御前を退下して、軍司令官宛の親書の特使に届けさせ、重ねて、「速やかに兵を撤退せねば、奉勅命令が下るであろう」

と秘密電報を小磯参謀長宛に打ったことによるといわれている。

関東軍はこの鶴の一声に屈服し、大命によらざる中国本土進出を中止したのであった。当時は、

真相は一切極秘であったので、作戦中の関東軍将兵はもとより、内外一般の人々に奇異の感じを与えたといわれている。

天皇の意図がこのように強硬であったのは、最大の要因として国際連盟の動向があったと思われる。

日本はこの年、一九三三年三月二十七日に遂に国際連盟脱退を通告したのであったが、国際連盟は満洲国の問題には熱心であったが、華北の問題には必ずしも介入しようとはせず、冷淡であった。しかし、天皇としては国際関係紛糾の際、これでもか、これでもかと押す関東軍の独走態勢にブレーキをかけられたのだと思われる。

停戦への兆

中国はその後華北の戦鬭の処理に困窮し、国際連盟にくりかえし提訴したが、連盟は満洲国の不承認を決定しただけで、華北問題を顧みてくれなかった。そこで中国は、知日派の湯爾和、雷寿榮、王克敏などを通じて日本の出先と接触を保ち、四月末には陳儀軍政部次長が根本博駐在武官と上海で停戦について打診し、歩みよりの可能性が出てきた。

こうした動きの中で、中国側は黄郛を主班とする駐平政務整理委員会の設置を決定し、日本側との交渉の窓口をつくった。黄郛は日本の陸地測量部修技所出身の知日派であった。

関東軍の派遣した板垣天津特務機関は、

「中国の時間かせぎの手に乗るな」

という意向で反対したし、北平の永津駐在武官も強硬に反対意見をもっており、中国軍の密雲方面への撤退を求むべしとの意志を表明していた。

このような情勢を背景に、中国軍の相も変らぬ挑戦的態度の持続を眼前に見ている関東軍の作戦課は、再び強硬態度に立ち帰り、

「わが軍の灤河撤退後、敵は再び灤東地区に進入し、挑戦的態度を持続しつつあり、故にこれに鉄鎚的打撃を加えざるべからず」

との決心の下に灤東地区への再進出を決意した。これには前回にこりて、東京の中央部の意向を充分に打診するため、小磯参謀長が上京して折衝にあたり、灤東地区進出の許可を得たことが大いに与って力があつたのであろう。

一九三三年（昭和八年）五月三日、再び灤東地区への進撃命令が第六、第八師団並に軍直轄部隊に下された。（関作命第五〇三号）この間において関東軍参謀部内の作戦課と停戦案に傾いていた情報課の間に多くの論争が交されたといわれている。

関東軍の隷下部隊は、命令一下直ちに行動を開始し、第六師団は破竹の勢で進撃を続け、五月十二日灤河を渡ってよせ集めの中国軍を西方に圧迫した。古北口方面の第八師団も五月十三日に石匣鎮を占領し、北平上空への威嚇飛行を行った。そして五月十八日には密雲北方地区に進出した。

（以下略）

五月二十五日、何応欽が正式に任命した停戦全権委員を密雲に派し、永津武官立会の下に西義一第八師団長との間に関東軍覚書に基く停戦案が文書を以て提示された。その内容は次の通りである。

一、中国軍は速かに延慶、順義、宝坻、寧河、芦台を通ずる線以南及び以西に一律に後退し、以後同線を越えて前進することなきこと。

二、中国軍が第一項に従うならば日本軍は現在線を越えて追撃せず。

三、日本軍は第一項の順守を確認した後、自主的に概ね長城の線に帰還する。

四、日本軍は誠意認識の第一歩として、随時飛行偵察及び必要の人員を派して中国軍の撤退状況を視察する。但し中国側はこれに保護と便宜を与えること。

続いて日中両軍の停戦本交渉が、五月三十日、三十一日の両日、白河口の塘沽^{タンクイ}で行なわれた。日本側代表は関東軍岡村参謀副長、以下喜多、永津、遠藤（三郎）などであり、中国側代表は北平軍事委員会分会総参議、熊斌中将以下の人々であった。

協定内容は、前述の密雲協定事項の他に治安維持事項を次の通り加えたものであった。

長城線以南にして、第一項に示す線以北及び以東の地域における治安維持は、中国側警察機関これに任ず。右機関のためには、日本軍の感情を刺激するが如き武力団体を用いることなきこと。これに対し熊斌中将より、

「中国軍は既に後方に撤退して誠意を示しているから、非武装地帯を早く現状に回復してもらいた

い。また日本軍撤退地区内で治安を乱す武力組織に、中国軍が必要な処置を行なう時は日本軍は誤解しないでもらいたい」

という条件をつけたが、日本軍は一切回答せず、調印後の懇談にゆずることにした。

このようにして塘沽停戦協定は締結され、武藤関東軍司令官は六月五日、作戰部隊の主力の帰還に関する命令を下達し関内作戰を終了したが、日本軍は河北省の東北部に有力な拠点を作ったことになったのである。

停戦後の外交交渉

北平には中山詳一書記官が駐在していたが、軍事協定成立後、内田康哉外相の指令に基き、黄郛を長とする駐平政務整理委員会を相手に外交交渉を開始し、次のような大会議により根本問題を処理して行った。

第一次大連会議（一九三三年七月三日～五日）

北平会議（一九三三年十一月七日～九日）

第二次大連会議（一九三四年七月二十三日～二十四日）

以上の会議においては、日本側の交渉団体は関東軍であり、政治事項でも外務省側は主導権がなかったといわれている。

右の外交交渉で最も問題となった点を解説すると次の通りであった。

「戦区」の接收問題

両軍の立入を禁止された地域を「戦区」という言葉で表現されているが、この地域には土匪団がはびこっていたし、関東軍が後援していた丁強軍（李際春軍）、石友三軍などが拠点をもっていたのでこれらの整理に手間どった。八月末までには概ね整理されたが、中央軍側の工作と関東軍側の工作が入り乱れ、土匪の介在と相俟って治安は大混乱であった。

通車問題

北平——奉天間の北寧鉄道を復旧し満洲、中国側双方乗り込みの列車を運行させることであり、二か月以上も中絶した列車の運行は、八月十三日から開始するようになった。しかしこの列車は、山海関で双方が乗り換えるものであった。

北平会議で最も問題であったのは、北平から奉天直通の国際列車を運行することであった。中国は満洲国を承認していないので、この問題は基本的な国策に関係があり大いに紛糾した。結局東亜通運公司組合という第三機関を作り、満洲側奉山鉄路と中国側北寧鉄路側から半額宛出資して資本金百萬元とし、双方損益共折半という形で運営することにし、直通列車を毎日一回、北平、奉天双方から一列車を運転する（乗務員は山海関で乗り換え）ということと決定し、七月一日から運行が開始された。しかしこの問題は、南京の中央政府会議で中国側の反対氣勢が高まっていた。

航空路線の設定

中国軍の撤退状況を監視するための航空觀察に端を発する満洲——中国本土間のいわゆる通空の

問題は最も困難であった。

一九三四年五月に関東軍は、華北航空公司という日中合弁会社を設立し、中国側に飛行場や施設を現物出資させ、関東軍側は満洲航空から飛行機と操縦士を提供させ、四月より錦州線、六月から承德線を発足させ共に北平への乗り入れをやって、中国側に漸次了承させる方針をとったので、中国側はしばしば嚴重な抗議を行ったが、黙殺していたようである。

その後天津会議で合弁の日中の比率（中国側五五パーセントまで日本譲歩）、飛行区域（中国側平津地方のみ、日本は華北全域を主張）などで遂に合意に達せず決裂した。

しかし、その後関東軍は各地の地方政權を相手に通空の実現をはかり、緩遠省の傳作儀相手に緩遠、包頭方面への軍用機乗入れを承認させた。後に支那事変直前、満洲航空の包頭格納庫が破壊されるという事件が起こり、この問題は後々まで尾を引いていたのであった。

通郵問題

中国の満洲国不承認主義により、この問題は最も紛糾した問題であった。

満洲国は当然独自の郵政を進めたので国民政府は、一九三二年（昭和七年）七月、全滿の郵便局閉鎖と撤退を断行した。そして約二年間、満洲、中国間の通郵は停止されていたのであるが、一九三四年になり英、米などの列強が、東、西の國際郵便ルートの要衝満洲国との通郵の必要を感じ、國際連盟理事会で検討が始まった。そして満洲国承認と切り離して満洲国經由の郵便料を連盟で支払うことになり、解決した。

中国側では満洲国切手の承諾を伴う一切の、通郵を極度に忌避し、もめにもめた。しかし最後に汪兆銘外交部長以下の北平入りに伴い、対日融和方針に則り、関東軍案を呑んだのであった。

右の関東軍案とは、通郵事務は兩國の郵政機關が実施し、満洲国という文字を表示しない新切手を使用し、料金は兩國の郵政庁が決定する。また在来の切手を貼ってあっても、正規の料金を納付したと認められるものは不足税を徴集しないというものであった。

最も政治的に困難であった通郵問題が一応解決したので、その後一九三四年に通電、通関問題も漸次解決した。しかし、中国側の満洲国不承認原則の下にあらゆる会談は難渋を極めたのであった。（以下略）

梅津・何応欽協定

昭和十年頃は、蔣政府は日中親善外交をやる方針であった。

ところが満洲に近い華北では国境線が近く、前述のような日中衝突事件が頻発していたので、北支軍閥の抗日意識は強く盛り上がり、昭和十年一月から五月までに華北で発生した反日満事件は大小五十数件に及んだそうだ。

これは張学良系の河北省主席于学忠と中央直系の藍衣社などの尖鋭分子がその原動力となっていた。

昭和九年以来、塘沽協定で非武装地域が出来たが、実際はこの非武装地帯は非常な混乱状態であり、この地区に孫匪（孫永勤匪軍）が根拠をおき、関東軍の守る熱河省境を越えて攪乱工作をやり、

関東軍も手を焼いていた。

そこで昭和十年五月末関東軍は停戦協定に基づくと称し一旦混成旅団を派遣して、この孫匪を一掃した後、直ちに関外に引き上げた。このとき于学忠は孫匪に協力的態度をとったといわれている。次いで親日的な天津の「国権報」と「振報」という新聞社の社長が同年五月初めに暗殺された。上海の藍衣社のテロであったといわれた。

右の二件を重視した天津駐屯軍（軍司令官梅津美治郎中将）は酒井隆参謀長を主任とし、

一、中国側官憲による対満陰謀、対日テロなどは停戦協定違反であり、その根拠地が北平、天津であるからこの地区も実質上停戦区域に包含させる必要を生じるであろう。

二、両社長の暗殺は一九〇二年の天津還付に関する交換公文違反であり、日本は条約に基き、自衛上必要とする行動をとることがあるであろう。

三、憲兵、政治訓練所、国民党部、藍衣社の華北よりの撤退と責任者の罷免。

四、于学忠河北省主席の罷免、とその指揮下第五十一軍の保定以南への移駐。

このように再度に渉る天津軍の強硬な要求に堪えかね、かつ国民政府との板ばさみになった何応欽は、六月十三日南京に逃避したが、翌六月十四日鮑文樾が軍事委員、北平分会委員長代理として何の口約を責任をもって実行すると申し入れ、その後「去る六月九日天津軍より提案のすべての事項を承認し、自主的に之を実行する」という通知書が天津軍に出されてこの件は落着いた。

梅津・何応欽協定はこのように一片の通知書だけで後はすべて口頭で行なわれたが、天津軍は中

央軍、于学忠軍を河北省から駆逐し、対日満反抗分子を一掃したのである。

土肥原・秦徳純協定

天津軍の梅津・何応欽協定に引き続き、関東軍も熱河西南方国境地帯の度重なる中国側の反満的事件に業をにやして、当時北平にいた土肥原奉天特務機関長をして一工作を実施させた。

この頃チャハル省方面の主要なる対満反抗事件は次の通りである。

一、第一次張北事件

天津軍川口参謀、池田外務書記生一行に対する暴行事件。

二、第一次熱西事件

熱河省豊寧県付近に宋哲元軍の一部が進出し、関東軍の第八師団の一部と衝突した事件。

三、第二次張北事件

内蒙アバカの特務機関員、大月、大井、山本氏ら四人が張北南門で脅迫された事件。

関東軍は、熱河省と接触地区であるチャハル省から宋哲元軍を駆逐する意図をもっており、土肥原奉天特務機関長に松井張家口特務機関長、高橋北平駐在武官と協力して、先ず宋哲元軍を黄河以南に撤退させるように要求することを指示した。

中国側は、まず宋哲元をチャハル省主席、並に隸下第二十九軍長より罷免し、民政庁長秦徳純をして主席を代行せしめること、及び張北の第三百三十二師を退去南下させることを通告して来た。

した。

一、張家口——張北南側以北にわたる宋部隊の南方への移駐。

二、排日機關の解散。

三、遺憾の意の表明、責任者の処罰。

期限は六月二十三日より二週間以内。

なお要望事項として、

一、蒙古人圧迫の停止。

二、日本人旅行者の援助。

三、日本軍事施設（飛行場、無電台など）の援助。

四、軍事及政治顧問の招聘。

五、撤退地域の治安維持は停戦地区に準ずる。

六月二十七日、泰徳純主席代行は北平武官に対し、正式文書をもって日本側要求を承認した。これがいわゆる土肥原・秦徳純協定である。宋哲元軍はこの協定に基き、長城以北から撤退し、二十九軍やその他の部隊は北平方面に集結した。

この頃になると北平に于学忠の追放、何応欽の南下により蒋介石の代理者はいなくなった。土肥原奉天特務機関長は華北自治工作を推進した結果、この年の十二月殷汝耕をして冀東自治政権を成立させ、また暫く遅れて南京中央政府の命により、宋哲元の冀察政権も誕生して、一応土肥原さん

が関東軍の与望を担っての北支工作は終結を告げたのであった。（陸軍少将今井武夫氏の項了）

大阪毎日新聞（北支版）

関公平『聖戦南北——戦陣秘話①』より

昭和十三年七月二日 発行

蘆溝橋事件

二つの怪！

七月七日、支那の旧都北京郊外の蘆溝橋畔、その深夜に起こった暴戾支那軍の皇軍に対する不法射撃——蘆溝橋事件が火の如くに燃えひろがって今日の重大なる支那事変になろうとは、誰が予期したであろうか。懸軍万里、今や皇国未曾有の大聖戦は五日のち、早くもここにその一周年を迎えんとするに当たり、かつて、また現に、弾雨の下に筆をひっさげて軍に従える本社記者たちのその思い出深き「戦陣秘話」を聞いていただきたい。



蘆溝橋事件の現地電報を本社に打ち終わってホッとしたのが昭和十二年七月八日の午前九時頃であった。この電報が支那事変の第一報になろうなどは、本当に私は夢想だもしなかった。新聞記者として、私として光栄あるあの第一電を思うとき、文字通り永劫忘ることが出来ない。



当時の事件を報じた毎日新聞

「きのうの晩ヤツとわかったぞ」
と北京特務機関の門前で出会いがしらに私に怒鳴るようにいったのは、冀察軍事顧問のN中佐であつた。
「何が？」

との注文であつた。

私は蘆溝橋の現場で偶然にも一外人記者に会い、その記者を通じて事件に対する日本の真意をよく世界に伝えることが出来たと思つていた。私の打つた蘆溝橋事件電報の一部。
午前八時半、戦況がやや落ち着いてきたころ米国外務省ソルスベリー氏とA・PのW記者とが連れだつて来た。W君は真相を確かめに来たという。そこで記者は抗日意識に燃えた二十九軍の挑戦によって事件が突発したこと、先方が二度も三度も発砲し来たに拘らず、わが軍は自重して発砲しなかったこと、夜明けまで一発も射たなかったわが軍の隠忍にもかかわらず、夜明けにかけて彼が攻勢に出たので、遂に自衛上わが方も応射するに至る旨を大略語つた。
まずこんな意味で、日本の真意をかれら両氏に説明したのであつた。思ひきや事件がもつて遂に七月二十七日、邦人居留民の交民巷（葛西注Ⅱ外国大使館区域）籠城となつたが、八月九日には皇軍の威武により早くも籠城は解かれたのであつた。八月末の某日、私は米国在住の或る未知の日本婦人から一通の手紙を受取つた。文面には故国の重大事件に痛心されておる様子がありありとかがわれていたが、用件は大体次のようなものであつた。
貴下の電報にあるあのW記者（葛西注Ⅱオーエン・ラチモア記者）は実に怪しからん電報を打っている。しかもその電報を載せた新聞社の主筆が、同記者は七年も北京に住み北支の諸事情は表裏ともよく知っている、故に同君のこの現地報告は信頼するに足るものであると前書きをし、日本軍は夜間演習にかこつけてどうしたと日本軍を誹謗した記事で全紙が埋められている、その新聞は貴地の軍当局に送るが、どうかW記者に忠告してくれ。

とおうむ返しに問うた記者の前に支那服を着た中佐は額の汗をハンケチで拭きながら自動車から降り立った。蘆溝橋事件が勃発してから五、六日経った早朝のことである。そのころは、わが方の事件不拡大の精神が二十九軍首脳者にも通じたのか、局地解決必ずしも不可能ではないときえ思われていた時であり、蘆溝橋の二十九軍は約定の地点に撤退、事件責任者の処罰その他の協定が日支両軍の間に成立し、彼我両軍は一定（以下紙面一部欠落につき不明）であったのである。ただどうも夜分になると、どこからともなしに銃声らしいものがあるので、双方から監視役を出し、銃声がどちら側から起るのか監視をしていたのであった。N中佐は昨夜二十九軍の陣地でその役目を勤めていたのであるが、中佐は、

「日本軍は約束を違えることは絶対にない」

と二十九軍の立会將校に断言したその途端、三発の銃声が聞こえた。しかもそれは確かに日本の陣地からである。今の今、大見えをきった自分はすぐに電話を日本側にかけた。するとわが軍から、「いや、いま貴方に電話をしようとしたところである。何時何分、どの方角で三発の銃声を聞いた。それは確かに二十九軍側であるから嚴重抗議をせねばならぬ」

との返事である。おかしいじゃないか、僕が聞いた銃声も三発、時間も方向も同じ、それが対陣している日本軍からは支那側に聞こえ、支那軍からは日本側に聞こえる。どうもその中間どころ（以下紙面一部欠落につき不明）紛れての共産分子（以下同、不明）ていうことに結（以下同、不明）う思う。君はと（以下同、不明）「テッキリそ（以下同、不明）えたのであった。私はかねがね北支は勿論

二十九軍内部にも共産分子が暗躍しつつあったことを聞いていたし、例の西安事件に引き続いて抗日強硬論のため、二・二事件を引き起こして王以哲師長を血祭にあげた上、北支に潜入した赤化青年將校孫銘九らが、二十九軍内部に盛んに働きかけているというような風説も小耳にはさんでいた時なので、私の判断もすぐそこに落ちたのであった。しかし、とにかくこの銃声のようなものが、當時ではまだ一般にはどうも変だという程度を出なかったのであるが、月日のたった今日では共産分子の手だったということがハッキリして来た。



ここに二つの事件余聞を通じて二十九軍の抗日意識、共産分子の暗躍がどんなものであったか、第三者が事件の勃発をどうみていたか、これによって多少ともその間の事情が理解し得られると思う。蘆溝橋、月の名所で名高い蘆溝橋畔にわが同胞の尊い血が注がれてから早くも一周年を迎えている。

〔葛西注〕

この毎日新聞切抜きは、〒665宝塚市小浜三丁目五一八 藤野幸治氏提供。この記事が掲載された毎日新聞は、毎日新聞東京本社、国会図書館のいずれにもなかった。終戦直後になくなったらしい。